

第5章

資料

感染症発生動向調査事業定点一覧

内科定点(60)

(平成23年12月31日現在)

医療機関名	所在地	電話番号
坂本クリニック	鶴見区生麦5-6-2	505-0347
渡辺医院	鶴見区潮田町3-133-2	501-6457
橋本小児科	鶴見区下末吉1-24-15	581-5447
内科・小児科前広医院	鶴見区豊岡町10-7	571-2333
杉浦内科クリニック	神奈川区白楽100-5 白楽コミュニティプラザ3F	402-5650
藤江医院	神奈川区平川町26-2	491-8578
薩田内科クリニック	神奈川区菅田町2647 菅田町メディカルビル1F	477-4022
福澤クリニック	神奈川区片倉1-9-3 まるあびる1F	488-5123
鈴木内科クリニック	西区戸部町5-204	231-3355
スカイビル内科	西区高島2-19-12 スカイビル21F	461-1603
新妻クリニック	中区根岸町3-176-39	629-3585
川俣クリニック	中区麦田町4-107 ライフ山手2F	624-2960
室橋内科医院	中区本牧三之谷23-16	621-0139
鶴養医院	南区宮元町3-55	731-2308
よなみね内科クリニック	南区共進町1-34 森ビル1F	720-6008
あずま医院	南区清水ヶ丘1-21	231-7026
木庭医院	港南区野庭町672-5	844-2665
古家内科医院	港南区丸山台2-34-8	844-3080
宮川医院	港南区上大岡西1-12-17	842-0978
川村クリニック	保土ヶ谷区権太坂1-52-14	742-1010
篠崎医院	保土ヶ谷区上星川3-15-5	371-0038
浅野医院	保土ヶ谷区西谷町866	371-3018
黒田医院	旭区柏町47-11	364-9772
左近山クリニック	旭区左近山1186-2 左近山団地7-14-101	351-6541
若葉台クリニック	旭区若葉台1-3-116	921-3700
石田クリニック	旭区白根6-1-3	953-3308
遠藤内科	磯子区栗木1-28-27	773-7273
板垣医院	磯子区洋光台3-5-31	833-6141
富野医院	磯子区岡村6-5-35	752-3221
いとうファミリークリニック	金沢区釜利谷東2-1-1 ハザアル金沢文庫4F	783-5769
林内科眼科クリニック	金沢区並木2-10-5	785-2000
桑原内科クリニック	金沢区六浦5-21-3-106	791-5751
中野こどもクリニック	港北区富士塚1-1-1	434-6500
服部クリニック	港北区大倉山1-28-3	545-0001
横山クリニック	港北区大倉山4-5-1大倉山ハイム1-101	531-1575
石井内科医院	港北区日吉本町6-26-5	561-4704
椎橋医院	港北区大豆戸町200 菊名レジデンスiapラザ101号	401-9092
野村医院	緑区いぶき野8-15	981-2568
みなみ台小に科	緑区長津田みなみ台1-20-9	982-7041
田村内科クリニック	緑区十日市場町804-2 ホームステプラザ十日市場西館101	989-6388
西川内科・胃腸科	青葉区あざみ野1-26-6	901-1241
徳岡クリニック	青葉区荏田町477	911-6000

医療機関名	所在地	電話番号
岡本診療所	青葉区青葉台1-29-5	981-9541
えなみクリニック	青葉区桂台2-27-21	962-9980
斉木クリニック	都筑区高山1-45 沖商事ビル102	941-0082
葛が谷つばさクリニック	都筑区葛が谷4-14 ベルテゼゾン1F	945-2772
小林クリニック	都筑区すみれが丘38-31	592-0041
川上診療所	戸塚区川上町359	822-5074
内科小児科むかひら医院	戸塚区汲沢1-39-24	861-4160
半田医院	戸塚区平戸2-30-8	821-1235
おかもと内科皮膚科クリニック	戸塚区川上町84-1 ケアハウスゆうあい4FB	822-3333
江口医院	栄区飯島町1413	891-0067
米田クリニック	栄区桂台北10-22	895-1300
大野内科医院	栄区本郷台3-1-6	896-0500
小林内科クリニック	泉区中田南2-2-2	801-2551
柏木医院	泉区和泉町2812	802-8253
かねむらクリニック	泉区中田北2-6-14 アイエイビルⅡ 1F-B	805-6685
まいえ内科	瀬谷区橋戸2-31-3 グランデュールプラザ2F	301-8561
三ツ境ライフクリニック渡部内科	瀬谷区三ツ境2-1 三ツ境ライフB館	360-3558
本郷クリニック	瀬谷区本郷3-20-2	304-2017

小児科定点(92)

医療機関名	所在地	電話番号
古谷小児科	鶴見区潮田町2-113-1	501-9160
田中小児科医院	鶴見区東寺尾2-15-34	581-2880
さくら診療所	鶴見区矢向5-4-34	581-6070
小児科佐久間医院	鶴見区馬場4-31-15	581-2604
山崎医院	鶴見区東寺尾6-32-15	581-4003
渡部クリニック	鶴見区鶴見中央4-43-6	506-3657
大口東総合病院	神奈川区入江2-19-1	401-2411
くぼた小児科	神奈川区新子安1-2-4 オルトヨコハマビジネスセンター 1F	438-0291
まつうら小児科内科	神奈川区三ツ沢中町9-2	321-3171
鈴木小児科医院	神奈川区神大寺4-8-15	491-4510
大西医院	神奈川区反町4-27-16	324-2121
村瀬クリニック	神奈川区西神奈川1-12-7 東神奈川イーストアーケビル1F	320-3306
富田こどもクリニック	西区藤棚町1-58-6	242-1543
西戸部こどもクリニック	西区西戸部町2-174	260-1495
青木小児科医院	西区境之谷73	231-4144
向山小児科医院	中区本牧三之谷22-1	623-7311
誠友医院	中区山下町113-4-3F	680-1283
寺道小児科医院	中区本牧町1-178	623-1021
小菅医院	中区石川町1-11-2 小菅医療ビル4F	651-6177
宇南山小児科医院	南区永田北3-36-5	714-1036
弘明クリニック	南区通町4-84メルベィユ弘明寺2F	721-3611
弓削医院	南区睦町1-7-5	731-2653
宮地小児科クリニック	南区六ツ川3-86-5	716-1011

医療機関名	所在地	電話番号
大川小児科医院	南区万世町2-27	231-4443
小島小児科医院	港南区東永谷2-2-20	823-1121
竹田こどもクリニック	港南区上永谷2-11-1 いずみプラザ'上永谷112	846-1088
原口小児科医院	港南区丸山台3-41-1	845-6622
ふくお小児科・アレルギー科	港南区港南台1-48-7	833-7737
八木小児科医院	港南区野庭町599-9	845-1177
星川小児クリニック	保土ヶ谷区星川2-4-1 星川SFビル3F	336-2260
おざき小児科	保土ヶ谷区仏向町121-2	348-4141
宮川内科小児科医院	保土ヶ谷区岩間町1-4-1	331-2478
横山医院	保土ヶ谷区峰岡町2-118	331-3296
北原医院	保土ヶ谷区上菅田町59	381-1622
琴寄医院	旭区鶴ヶ峰1-13-2	373-6752
おじま小児科	旭区二俣川2-58 大洋ビル2F	361-0212
サンクリニック	旭区柏町97-8	366-6822
川島医院	旭区上白根町891 西ひかりが丘団地18-5-102	952-2039
小林小児科医院	旭区二俣川1-65	361-6116
育愛小児科医院	旭区中白根1-10-15	951-1152
矢崎小児科	磯子区磯子2-13-13	751-4378
さいとう小児科	磯子区岡村7-20-14	752-4882
住田こどもクリニック	磯子区西町6-39	753-7151
バニーこども診療所	磯子区洋光台6-19-43	830-0767
浅井こどもクリニック	金沢区釜利谷東2-14-11 高野ビル2F	785-1152
江原小児科医院	金沢区並木1-14-2	773-8533
大久保医院	金沢区六浦南2-42-18	788-6565
高橋こどもクリニック	金沢区富岡東5-18-1 長谷川メディカルプラザ'富岡2階-G	775-3111
ふじわら小児科	金沢区富岡西1-48-12	773-6333
あべこどもクリニック	港北区箕輪町2-15-22	566-2112
小机診療所	港北区小机町1451	471-9696
大川小児クリニック	港北区綱島東2-12-19 福島ビル1F	546-1071
カンガルーこどもクリニック	港北区北新横浜1-2-3 三橋ビル1F	309-0755
斉藤小児科心とからだのクリニック	港北区高田東1-25-3	531-3574
マリアこどもクリニック	港北区岸根町408-123	430-5415
日吉こどもクリニック	港北区日吉本町1-9-26 MKハイム1F	560-1850
シブヤチャイルドクリニック	港北区大倉山3-56-22 ナビウス大倉山106	542-6915
一色こどもクリニック	緑区白山1-1-3 タイアパレス鴨居1F	933-0061
ちはら小児クリニック	緑区霧が丘3-2-9	923-1226
森の子キッズクリニック	緑区中山町750番地1	929-5501
さかたに小児科	緑区台村町309-1 土井ビル1F	930-3110
ぽっけキッズクリニック	緑区長津田みなみ台6-24-13	988-5330
太田こどもクリニック	青葉区あざみ野1-8-2 あざみ野メディカルプラザ'3F	909-5335
渡辺医院	青葉区奈良町1670-44	962-8126
武沼小児科医院	青葉区青葉台1-13-13	981-6122
あざがみ小児クリニック	青葉区美しが丘西3-65-6	909-0092
はやし小児科医院	青葉区松風台13-5 ライムライト松風台3	983-3254

医療機関名	所在地	電話番号
有本小児科内科	青葉区美しが丘2-20-18 トムス有本101	901-6870
あかねファミリークリニック	青葉区あかね台1-17-38	985-6607
水野クリニック	都筑区南山田町4258	593-4040
大山クリニック	都筑区茅ヶ崎南5-1-10 ノーブル茅ヶ崎	941-7171
山下小児科クリニック	都筑区北山田3-18-15	593-9770
都筑メディカルクリニック	都筑区荏田南1-12-16	943-8801
こどもの木クリニック	都筑区荏田南3-1-7	947-1888
マサカ小児科内科	戸塚区品濃町523-3 マサカビル1F	823-7866
清田小児科医院	戸塚区戸塚町1505-3	861-3015
小雀小児科医院	戸塚区小雀町1123-2	852-2354
小泉小児科クリニック	戸塚区汲沢8-5-5	871-5566
ドリーム小児科	戸塚区俣野町1404-8	851-3661
東戸塚小児科クリニック	戸塚区品濃町535-2 ニューシティ東戸塚タワースシティ1st302	825-1799
吉田こどもクリニック	栄区野七里1-4-22	891-8888
若竹クリニック	栄区元大橋1-27-5	891-6900
内山小児科医院	栄区笠間2-31-13	892-4090
つちだこどもクリニック	栄区本郷台3-1-7	893-4176
あいかわこどもクリニック	泉区中田北2-6-14 アイエイビルⅡ1F	805-6605
渡辺こどもクリニック	泉区西が岡1-13-6	813-1618
緑園こどもクリニック	泉区緑園2-1-6-201	810-0555
はっとり小児科	泉区和泉町2860-1 立場AMANOビル2F-A	804-4153
瀬谷こどもクリニック	瀬谷区中央1-10 カサ・テ・パティオ2F	304-0045
池部小児科・アレルギー科	瀬谷区三ツ境21-10	360-6080
清水小児科	瀬谷区阿久和西3-1-13 あくわメディカルビル内	360-9191
ひかりこどもクリニック	瀬谷区相沢2-60-6	306-1066

眼科定点(19)

医療機関名	所在地	電話番号
ちぐさ眼科医院	鶴見区鶴見中央4-16-3 トミヤビル4F	502-0222
安田眼科医院	神奈川区反町1-6-12 リキヘリアンサス1F	313-2022
秋山眼科医院	中区尾上町3-28	641-9361
吉野町眼科	南区山王町4-26-3 ストックビル秋山1階	260-6726
池袋眼科医院	港南区上大岡西1-18-5 ミオカM202	842-0380
小野江眼科	保土ヶ谷区帷子町1-12	335-2171
塚原眼科医院	旭区二俣川1-5 丸伊ビル2F	363-1102
洋光台眼科クリニック	磯子区洋光台3-13-5-110	835-0143
おいかわ眼科	金沢区能見台通8-1-2F	784-8558
つなしま眼科	港北区綱島西2-13-9 ヴィラ綱島ビル1F	531-7132
ひよし眼科	港北区日吉本町1-4-18 平林ビル1F	562-5331
中山北口眼科	緑区中山町306-1 ミヨシズシードビル502	930-3090
眼科中井医院	青葉区美しが丘2-14-7	905-5777
木崎眼科	青葉区青葉台2-9-10 第3フジモトビル2F	985-3719
浜崎眼科医院	都筑区勝田町1298-2	949-4222
秋元眼科医院	戸塚区柏尾町1016	822-2520

医療機関名	所在地	電話番号
永井眼科医院	栄区本郷台3-1-3-2F	893-5114
緑園都市眼科後藤クリニック	泉区緑園4-1-2 緑園都市ライフ2F	813-2277
高橋眼科クリニック	瀬谷区橋戸2-31-3 グランデュールプラザ2F	302-6337

性感染症定点(27)

医療機関名	所在地	電話番号
さなだ医院	鶴見区鶴見中央4-2-3	501-1117
熊切産婦人科	鶴見区豊岡町10-2	571-0211
原産科婦人科クリニック	神奈川区六角橋1-30-4	401-9511
コシ産婦人科医院	神奈川区白楽71-8	432-2525
横浜相鉄ビル皮膚・泌尿器科医院	西区北幸1-11-5 相鉄KSビル2F	311-3208
石橋泌尿器科皮膚科クリニック	中区長者町9-166-1 ソフィアヨコハマ1F	263-0820
公平泌尿器科医院	南区井土ヶ谷下町213 第2江洋ビル4F	713-6311
中尾泌尿器科医院	港南区上大岡西1-19-17 ロッキークエタ第2ビル4F	845-9620
木下クリニック	港南区丸山台3-11-15	843-4310
杉本皮膚科	保土ヶ谷区川辺町2-2 ハイロッドハウス星川B-108	333-4422
浅井皮膚科クリニック	保土ヶ谷区帷子町1-14	334-3412
小関産婦人科医院	旭区二俣川2-62-7	363-0660
希望が丘いずみクリニック	旭区中希望が丘236-19	391-0567
たけだ泌尿器科クリニック	磯子区杉田1-17-1 プラサSUGITA201	771-3055
小野医院	金沢区洲崎町5-41	701-8771
片桐レディースクリニック	金沢区谷津町153-3	780-5513
新横浜母と子の病院	港北区鳥山町650-1	472-2911
市川宝クリニック	港北区綱島西1-11-18	543-1103
あまかす医院	緑区白山1-1-3	931-2404
レディースクリニック服部	青葉区美しが丘5-3-2	902-0303
ワキタ産婦人科	青葉区藤が丘2-6-1	973-7081
聖ローザクリニック センター北	都筑区中川中央1-29-24 アビテノール3C	914-6355
山本内科・タワーズ皮膚科	戸塚区品濃町535-2 中央街区D棟306	825-5871
坂西医院泌尿器科	戸塚区矢部町645-10	862-5677
オカノ泌尿器科皮膚科医院	栄区笠間5-20-19 斉藤ビル2F	891-5860
泌尿器科あべクリニック	泉区中田西1-1-27 ネクストアイ3F	805-5808
まきずみ泌尿器科	瀬谷区瀬谷3-1-29 瀬谷メディカルプラザ2階	300-3711

基幹病院定点(3)

医療機関名	所在地	電話番号
済生会横浜市南部病院	港南区港南台3-2-10	832-1111
横浜市立市民病院	保土ヶ谷区岡沢町56	331-1961
昭和大学藤が丘病院	青葉区藤が丘1-30	971-1151

病原体定点(16)

医療機関名	所在地	電話番号
古谷小児科(小児科)	鶴見区潮田町2-113-1	501-9160
室橋内科医院(内科)	中区本牧三之谷23-16	621-0139

医療機関名	所在地	電話番号
とみい眼科(眼科)	中区伊勢佐木町6-143-2 ITビル1F	261-1103
片山こどもクリニック(小児科)	港南区上大岡西2-3-6 ビルディングアルダ2F	844-7577
横浜市南部病院(基幹)	港南区港南台3-2-10	832-1111
横浜市立市民病院(基幹)	保土ヶ谷区岡沢町56	331-1961
さいとう小児科(小児科)	磯子区岡村7-20-14	752-4882
石井内科医院(内科)	港北区日吉本町6-26-5	561-4704
あべこどもクリニック(小児科)	港北区箕輪町2-15-22	566-2112
有本小児科内科(小児科)	青葉区美しが丘2-20-18 ドムス有本101	901-6870
はやし小児科医院(小児科)	青葉区松風台13-5	983-3254
昭和大学藤が丘病院(基幹)	青葉区藤が丘1-30	974-8143
内科小児科むかひら医院(内科)	戸塚区汲沢1-39-24	861-4160
中条小児科医院(小児科)	栄区上之町8-7	892-2583
瀬谷こどもクリニック(小児科)	瀬谷区中央1-10 カサ・デ・パティオ2F	304-0045
清水小児科(小児科)	瀬谷区阿久和西3-1-13 あくわメディカルウイレッジ内	360-9191

疑似症定点(単独は56定点、内科定点60小児科定点92を加え208定点)

医療機関名	所在地	電話番号
クリニック寺尾	鶴見区馬場4-40-12	571-0792
鶴見クリニック	鶴見区豊岡町6-9 サンワイスビル3F	584-8233
くらた内科クリニック	鶴見区豊岡町2-3 フーガ3ビル505号室	576-3370
岡本こどもクリニック	鶴見区豊岡町7-7 鶴見駅西口医療ビル一階	570-0377
あしほ総合クリニック	鶴見区鶴見中央3-10	508-3611
井関医院	神奈川区栄町6-1 ヨコハマポートサイトロア式番館1F	451-6864
ななしまクリニック	神奈川区七島町161-5	401-9884
神之木クリニック	神奈川区西寺尾3-25-19-4F	435-0113
三ツ沢ハイタウンクリニック	西区宮ヶ谷25-2 三ツ沢ハイタウン1-110	312-0290
いちの内科クリニック	西区平沼1-2-12 甘糟平沼ビル2階	314-1125
中島医院	中区大和町2-34-5 山手駅前クリニックビル1F	621-8713
南永田診療所	南区永田みなみ台2-12-102	714-4880
上六ッ川内科クリニック	南区六ッ川1-873-3	306-8026
横浜ひまわりクリニック	南区西中町4-72	231-5550
岡内科クリニック	港南区上大岡西1-19-18 長瀬ビル3F	841-0133
後藤内科医院	港南区日野7-4-6	842-3664
諏訪クリニック	港南区港南台2-11-17	834-1651
豊福医院	港南区上永谷3-18-16	844-2255
新桜クリニック	保土ヶ谷区新桜ヶ丘2-24-12-2F	352-4482
くぬぎ台診療所	保土ヶ谷区川島町1404 くぬぎ台団地1-5-104	371-5278
小泉内科・胃腸科クリニック	保土ヶ谷区星川1-4-5	331-3325
西山皮膚科	旭区中希望が丘100-4 希望が丘センタービル2F	360-7538
いわま内科クリニック	旭区今宿西町475	958-2377
白根診療所	旭区白根5-16-30	953-8881
つくしクリニック	旭区今宿2-63-14	360-0028
藤田小児科	磯子区杉田1-20-22 三葉ビル	771-2671
土屋内科医院	磯子区栗木1-20-5	773-0011

医療機関名	所在地	電話番号
小谷医院	金沢区能見台3-7-7	773-5551
山口診療所	金沢区釜利谷東2-20-9 クリニックビル2F	785-3912
とみおか診療所	金沢区富岡東6-1-3	773-7213
富岡皮膚科クリニック	金沢区富岡西7-3-3 芥木ビル2階	773-2212
高田中央病院	港北区高田西2-6-5	592-5557
大倉山記念病院	港北区樽町1-1-23	531-2546
えびすクリニック	港北区綱島西2-7-2 第7吉田ビル2・3F	546-8611
日横クリニック	港北区日吉本町1-20-16 日吉教養センタービル2F	563-4115
まつみ医院	港北区日吉本町5-4-1	561-9300
佐々木消化器科内科	港北区綱島東2-12-19 福島クリニックビル3F	545-4588
鴨居小児科内科医院	緑区鴨居1-3-13-107号	935-3281
さいとうクリニック	緑区北八朔町1208-1	932-6555
松田クリニック	青葉区美しが丘西2-6-3	909-0130
さつきが丘こどもクリニック	青葉区さつきが丘4-10 アモンクール1F	971-2239
井上小児科医院	青葉区市ヶ尾町1167-1 ラバーブル昌和1F	972-0250
川瀬医院	青葉区田奈町45-6	981-3111
あざみ野皮膚科	青葉区あざみ野2-9-11 サンサーラあざみ野ビル3F	905-1241
山本皮フ科クリニック	青葉区新石川3-15-16 TMIビル 1103	910-5033
山口医院	都筑区中川1-5-9	912-2188
小川メディカルクリニック	都筑区荏田南3-37-15 横浜青葉クリニックセンター2F	943-6566
荒井皮膚科クリニック	都筑区茅ヶ崎南3-1-60 サ・グレース1FA	945-1112
うえの小児科クリニック	戸塚区吉田町944-5 KAWARA1F	869-0311
ゆめはまクリニック	戸塚区舞岡町3406	828-2007
わかば医院	戸塚区深谷町55-71	851-3232
しばた医院	戸塚区戸塚町2810-8 土屋クリニックビル1F	865-6666
よしい内科クリニック	戸塚区汲沢1-10-46 踊場メディカルセンター2F	861-2511
山崎脳神経外科	栄区长沼町188-8	871-3996
杉本医院	栄区柏陽20-27	891-5417
みたに内科循環器科クリニック	泉区和泉町3839-1 フォレストいずみ中央	806-5067

横浜市感染症発生動向調査事業実施要綱

制 定 平成 12 年 11 月 27 日衛感第 340 号（局長決裁）

最近改正 平成 23 年 1 月 28 日健健全第 1720 号（局長決裁）

第 1 趣旨

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」の施行に伴い、厚生労働省が定めた「感染症発生動向調査事業実施要綱」（以下「国要綱」という。）を基本に、横浜市において、感染症発生動向調査事業を実施するために必要な事項を定める。

第 2 対象感染症

本事業の対象とする感染症は次のとおりとする。

1 全数把握の対象

一類感染症

(1) エボラ出血熱、(2) クリミア・コンゴ出血熱、(3) 痘そう、(4) 南米出血熱、(5) ペスト、(6) マールブルグ病及び(7) ラッサ熱

二類感染症

(8) 急性灰白髄炎、(9) 結核、(10) ジフテリア、(11) 重症急性呼吸器症候群（病原体がコロナウイルス属 S A R S コロナウイルスであるものに限る）及び(12) 鳥インフルエンザ（H5N1）

三類感染症

(13) コレラ、(14) 細菌性赤痢、(15) 腸管出血性大腸菌感染症、(16) 腸チフス及び(17) パラチフス

四類感染症

(18) E 型肝炎、(19) ウエストナイル熱（ウエストナイル脳炎を含む）、(20) A 型肝炎、(21) エキノコックス症、(22) 黄熱、(23) オウム病、(24) オムスク出血熱、(25) 回帰熱、(26) キャサヌル森林病、(27) Q 熱、(28) 狂犬病、(29) コクシジオイデス症、(30) サル痘、(31) 腎症候性出血熱、(32) 西部ウマ脳炎、(33) ダニ媒介脳炎、(34) 炭疽、(35) チクングニア熱、(36) つつが虫病、(37) デング熱、(38) 東部ウマ脳炎、(39) 鳥インフルエンザ（H5N1 を除く）、(40) ニパウイルス感染症、(41) 日本紅斑熱、(42) 日本脳炎、(43) ハンタウイルス肺症候群、(44) B ウイルス病、(45) 鼻疽、(46) ブルセラ症、(47) ベネズエラウマ脳炎、(48) ヘンドラウイルス感染症、(49) 発しんチフス、(50) ボツリヌス症、(51) マラリア、(52) 野兎病、(53) ライム病、(54) リッサウイルス感染症、(55) リフトバレー熱、(56) 類鼻疽、(57) レジオネラ症、(58) レプトスピラ症、(59) ロッキー山紅斑熱

五類感染症（全数）

(60)アメーバ赤痢、(61)ウイルス性肝炎（E型肝炎及びA型肝炎を除く）、(62)急性脳炎（ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く）、(63)クリプトスポリジウム症、(64)クロイツフェルト・ヤコブ病、(65)劇症型溶血性レンサ球菌感染症、(66)後天性免疫不全症候群、(67)ジアルジア症、(68)髄膜炎菌性髄膜炎、(69)先天性風しん症候群、(70)梅毒、(71)破傷風、(72)バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症、(73)バンコマイシン耐性腸球菌感染症、(74)風しん、(75)麻しん

新型インフルエンザ等感染症

(102)新型インフルエンザ、(103)再興型インフルエンザ

2 定点把握の対象

五類感染症（定点）

(76)RSウイルス感染症、(77)咽頭結膜熱、(78)A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、(79)感染性胃腸炎、(80)水痘、(81)手足口病、(82)伝染性紅斑、(83)突発性発しん、(84)百日咳、(85)ヘルパンギーナ、(86)流行性耳下腺炎、(87)インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）、(88)急性出血性結膜炎、(89)流行性角結膜炎、(90)性器クラミジア感染症、(91)性器ヘルペスウイルス感染症、(92)尖圭コンジローマ、(93)淋菌感染症、(94)クラミジア肺炎（オウム病を除く）、(95)細菌性髄膜炎、(96)ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、(97)マイコプラズマ肺炎、(98)無菌性髄膜炎、(99)メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症、(100)薬剤耐性アシネトバクター感染症、(101)薬剤耐性緑膿菌感染症

法第14条第1項に規定する厚生労働省令で定める疑似症

(104)摂氏38度以上の発熱及び呼吸器症状(明らかな外傷又は器質的疾患に起因するものを除く。)若しくは(105)発熱及び発しん又は水疱(ただし、当該疑似症が二類感染症、三類感染症、四類感染症又は五類感染症の患者の症状であることが明らかな場合を除く。)

3 オンラインシステムによる積極的疫学調査結果の報告の対象

二類感染症

(12)鳥インフルエンザ（H5N1）

第3 実施主体

実施主体は、健康福祉局健康安全課（以下「健康福祉局」という。）、衛生研究所及び各区福祉保健センター（以下「福祉保健センター」という。）とする。

第4 実施体制の整備

1 横浜市感染症情報センター

地方感染症情報センターとして横浜市感染症情報センター（以下「感染症情報センター」

という。)を、衛生研究所感染症・疫学情報課内に設置する。感染症情報センターは、横浜市内における患者情報、疑似症情報及び病原体情報を収集・分析し、健康福祉局及び福祉保健センターへ報告するとともに、全国情報と併せて、これらを速やかに医師会等の関係機関に提供・公開する。

2 指定届出機関（定点）

健康福祉局は、定点把握対象の五類感染症について、患者情報、疑似症情報及び病原体情報を収集するため、患者定点、疑似症定点及び病原体定点をあらかじめ選定し、神奈川県へ進達する。

3 横浜市感染症発生動向調査委員会

横浜市内における感染症に関する情報の収集、分析の効果的・効率的な運用を図るため、疫学等の専門家、福祉保健センター及び衛生研究所の代表、医師会の代表等からなる横浜市感染症発生動向調査委員会（以下「感染症委員会」という。）を置く。

感染症委員会の事務局は感染症情報センター及び健康福祉局とし、感染症委員会の運営については、横浜市感染症発生動向調査委員会設置運営要綱に定める。

第5 事業の実施

1 一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、新型インフルエンザ等感染症、指定感染症及び全数把握対象の五類感染症

(1) 調査単位及び実施方法

ア 診断した医師

国要綱に定めるとおりとする。

イ 福祉保健センター

(ア) 当該届出を受けた福祉保健センターは、速やかに国が定める届出基準を参照し、届出の内容が合致するかどうか点検を行う。記載もれや不明な点は、届出を行った医師に確認し、必要に応じて補記・補正を行い、発生届を感染症情報センター及び健康福祉局に送付する。

また、当該患者（四類感染症については、第2の(51)を除く。また、全数把握対象の五類感染症については、第2の(60)、(62)、(64)、(65)、(66)、(68)、(69)、(71)、(72)、(73)、(74)又は(75)とする。）を診断した医師に対して、必要に応じて病原体検査のための検体又は病原体情報の衛生研究所への提供について、別記様式「一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症検査票（病原体）」を添付して依頼する。

(イ) 福祉保健センターは、オ(ア)により衛生研究所から検体の検査結果の通知があった場合は、診断した医師に別記様式「一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症検査票（病原体）（医療機関あて検査結果通知用）」により速やかに送付する。

ウ 健康福祉局

- (ア) 健康福祉局は、福祉保健センターからイ(ア)による送付があった場合は、直ちに、内容の点検等を行ったうえで、感染症情報センターと連絡もれがないか等、確認する。
- (イ) 健康福祉局は、届出を受けた感染症にかかる発生状況や感染症情報センターから提供のあった患者情報及び病原体情報等について、必要に応じ、区内の関係機関に情報提供し連携を図る。

エ 感染症情報センター

- (ア) 感染症情報センターは、福祉保健センターからイ(ア)による送付があった場合は、直ちに、届出内容を感染症発生動向調査システムに入力する。
- (イ) 感染症情報センターは、横浜市域内の全ての患者情報及び病原体情報（検査情報を含む。）を収集、分析するとともに、その結果を週報（月単位の場合は月報）等として公表される都道府県情報、全国情報と併せて、健康福祉局、福祉保健センター、指定医療機関その他の関係医療機関、医師会、教育委員会等の関係機関に提供・公開する。

オ 衛生研究所

- (ア) 衛生研究所は、別記様式「一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症検査票（病原体）」及び検体又は病原体情報が送付された場合にあっては、当該検体を検査し、その結果を別記様式「一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症検査票（病原体）（福祉保健センターあて結果通知用）」により福祉保健センターに送付する。また、感染症発生動向調査に必要な項目をコンピュータ・オンラインシステムにより、中央感染症情報センターへ伝送する。
- (イ) 検査のうち、衛生研究所において実施することが困難なものについては、必要に応じて国立感染症研究所に検査を依頼する。
- (ウ) 衛生研究所は、患者が一類感染症と診断されている場合、横浜市域を超えた集団発生があった場合等の緊急の場合にあっては、検体を国立感染症研究所に送付する。

2 定点把握対象の五類感染症

- (1) 対象とする感染症の状態
国要綱に定めるとおりとする。

(2) 定点の選定

ア 患者定点

定点把握対象の五類感染症の発生状況を把握するため、健康福祉局は、横浜市全体の感染症の発生状況を把握できるよう考慮し、医師会等の協力を得て、行政区ごとに医療機関の中から患者定点を選定する。

なお、患者定点の種類、その対象疾患及び定点数については、国要綱に定めるとおりとする。

イ 病原体定点

病原体の分離等の検査情報を収集するため、健康福祉局は、原則として、患者定点として選定された医療機関の中から病原体定点を選定する。

なお、病原体定点の種類、その対象疾患及び定点数については、国要綱に定めるとおりとする。

(3) 調査単位等

国要綱に定めるとおりとする。

(4) 実施方法

ア 患者定点

(ア) 患者定点として選定された医療機関は、速やかな情報提供を図る趣旨から、調査単位の期間の診療時において、国が定める報告基準により、患者発生状況の把握を行う。

(イ) 2の(ア)により選定された定点把握対象の指定医療機関においては、国が定める基準及び様式に従い、それぞれ調査単位の患者発生状況等を記載する。

(ウ) (イ)の患者発生状況等の情報については、指定された方法により福祉保健センター又は感染症情報センターへ報告する。

イ 病原体定点

(ア) 病原体定点として選定された医療機関は、国が定める病原体検査指針により、微生物学的検査のために検体を採取する。

(イ) 病原体定点で採取された検体は、別記様式「病原体定点からの検査依頼書」を添えて、速やかに衛生研究所へ送付する。

ウ 福祉保健センター

福祉保健センターは、ア(ウ)により定点把握対象の指定医療機関から得られた患者情報を、調査単位が週単位の場合は調査対象の週の翌週の火曜日までに、月単位の場合は調査対象月の翌月の3日までに、感染症情報センターへ送付する。

また、対象感染症についての集団発生その他特記すべき情報についても、感染症情報センター及び健康福祉局へ報告する。

エ 健康福祉局

健康福祉局は、感染症情報センターから情報提供のあった患者情報及び病原体情報について、必要に応じ、区内の関係機関に情報提供し連携を図る。

オ 感染症情報センター

- (ア) 感染症情報センターは、患者定点又は福祉保健センターから患者情報の報告があり次第、感染症発生動向調査システムに入力する。
- (イ) 感染症情報センターは、横浜市域内の全ての患者情報及び病原体情報を収集、分析するとともに、その結果を週報（月単位の場合は月報）等として公表される都道府県情報、全国情報と併せて、健康福祉局、福祉保健センター、指定医療機関その他の関係医療機関、医師会、教育委員会等の関係機関に提供・公開する。

カ 衛生研究所

- (ア) 衛生研究所は、イ(イ)により別記様式「病原体定点からの検査依頼書」及び検体が送付された場合にあっては、当該検体を検査し、その結果を病原体情報として、別記様式「病原体定点からの検査依頼書（医療機関あて検査結果通知用）」により病原体定点に通知するとともに、感染症発生動向調査に必要な病原体情報をコンピュータ・オンラインシステムにより、中央感染症情報センターへ伝送する。
- (イ) 検査のうち、衛生研究所において実施することが困難なものについては、必要に応じて国立感染症研究所に検査を依頼する。
- (ウ) 衛生研究所は、横浜市域を超えた集団発生があった場合等の緊急の場合にあっては、検体を国立感染症研究所に送付する。

3 法第14条第1項に規定する厚生労働省令で定める疑似症

(1) 対象とする感染症の状態

国要綱に定めるとおりとする。

(2) 疑似症定点の選定

疑似症の発生状況を把握するため、健康福祉局は、横浜市全体の感染症の発生状況を把握できるよう考慮し、医師会等の協力を得て、行政区ごとに医療機関の中から疑似症定点を選定する。

(3) 実施方法

ア 疑似症定点

- (ア) 疑似症定点として選定された医療機関は、速やかな情報提供を図る趣旨から、診療時において、国が定める報告基準により、直ちに疑似症発生状況の把握を行う。
- (イ) (2)により選定された定点把握の対象の指定届出機関においては、国が定める基準に従い、直ちに疑似症発生状況等を記載する。なお、当該疑似症の届出については、原則として症候群サーベイランスシステムへの入力により実施する。
- (ウ) (イ)の届出に当たっては法施行規則第7条に従い行う。

イ 健康福祉局

健康福祉局は、疑似症の発生状況等を把握し、市町村、指定医療機関その他の関係医

療機関、医師会、教育委員会等の関係機関に発生状況等を提供し連携を図る。

ウ 感染症情報センター

(ア) 感染症情報センターは、疑似症定点において症候群サーベイランスシステムへの入力を実施することができない場合、当該疑似症定点から得られた疑似症情報を、直ちに、症候群サーベイランスシステムに入力する。

また、対象疑似症についての集団発生その他特記すべき情報についても、健康福祉局へ報告する。

(イ) 感染症情報センターは、横浜市内の全ての疑似症情報を収集、分析するとともに、その結果を週報等として公表される都道府県情報、全国情報と併せて、健康福祉局、福祉保健センター、指定医療機関その他の関係医療機関、医師会、教育委員会等の関係機関に提供・公開する。

4 オンラインシステムによる積極的疫学調査結果の報告の実施方法

(1) 福祉保健センター

鳥インフルエンザ（H5N1）に係る積極的疫学調査を実施した福祉保健センターは、国の定める基準に従い、関係書類を健康福祉局及び感染症情報センターに送付する。医療機関から検体が提出される場合には、感染症情報センターに連絡した上で、医療機関から検体を受け取り、衛生研究所へ搬入する。

(2) 感染症情報センター

ア 感染症情報センターは、(1)により得られた情報を、直ちに疑い症例調査支援システムに入力する。

イ 医療機関より検体が提出される場合には、疑い症例調査支援システムが発行する検査依頼票を打ち出し、衛生研究所に送付する。

(3) 衛生研究所

ア 衛生研究所は、検体が送付された場合にあつては、当該検体を検査し、その内容を直ちに感染症情報センターに送付する。

イ 鳥インフルエンザ（H5N1）に係る積極的疫学調査の結果を厚生労働省に報告する場合にあつては、法施行規則第9条第2項に従い、検体を国立感染症研究所に送付する。検体を送付する場合には、(2)イにより感染症情報センターから送付された検査依頼票を添付する。

第6 その他

本要綱に定める事項以外の内容については、必要に応じて健康福祉局長が定めることとする。

なお、感染症発生動向調査事業については、本要綱に基づき実施することとし、結核発生動向調査事業については、従来の「横浜市結核・感染症発生動向調査事業実施要綱」に基づ

き実施することとする。

附 則

(施行期日)

- 1 この実施要綱は、平成 15 年 11 月 5 日から施行する。

附 則

この要綱は、平成 18 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この要綱は、平成 18 年 6 月 12 日から施行する。

附 則

この要綱は、平成 19 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

(施行期日)

- 1 この要綱は、平成 20 年 1 月 1 日から施行する。

(経過措置)

- 2 改正前の要綱の規定により調製した帳票で現に残存するものについては、当分の間、必要な所を訂正した上、引き続きこれを使用することができる。

附 則

(施行期日)

- 1 この要綱は、平成 20 年 5 月 12 日から施行する。

(経過措置)

- 2 改正前の要綱の規定により調製した帳票で現に残存するものについては、当分の間、必要な所を訂正した上、引き続きこれを使用することができる。

附 則

(施行期日)

- 1 この要綱は、平成 23 年 2 月 1 日から施行する。

(経過措置)

- 2 改正前の要綱の規定により調製した帳票で現に残存するものについては、当分の間、必要な所を訂正した上、引き続きこれを使用することができる。

別記様式一覧表

一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症
検査票（病原体）（4枚複写式）

（医療機関控）

（福祉保健センター控）

（福祉保健センターあて検査結果通知用）

（医療機関あて検査結果通知用）

病原体定点からの検査依頼書（3枚複写式）

（医療機関控）

（衛生研究所控）

（医療機関あて検査結果通知用）

横浜市感染症発生動向調査委員会設置運営要綱

最近改正 平成 23 年 5 月 24 日 健健安第 304 号（局長決裁）

（設置）

第 1 条 横浜市内における感染症に関する情報の収集、分析の効果的、効率的な運用を図るため、横浜市感染症発生動向調査委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（所掌事務）

第 2 条 委員会は、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（平成 10 年法律第 114 号。以下「法」という。）第 16 条の規定に基づき、法第 12 条から第 15 条までの規定により収集した感染症に関する情報について分析を行い、感染症の予防のための情報を積極的に公表する。

（組織）

第 3 条 委員会は、委員 6 人以上 10 人以下をもって組織する。

2 委員は、次の各号に掲げる者のうちから健康福祉局長が任命する。

- (1) 学識経験者
- (2) 横浜市医師会を代表する者
- (3) 福祉保健センター及び衛生研究所の代表

（委員の任期）

第 4 条 委員の任期は、3 年とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 委員は、再任されることができる。

（委員長及び副委員長）

第 5 条 委員会に、委員長及び副委員長 1 人を置く。

2 委員長及び副委員長は、委員の互選によって定める。

3 委員長は、委員会を代表し、会務を総理し、会議の議長となる。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

（招集）

第 6 条 委員会の会議は、委員長が毎月 1 回、その他必要に応じて招集する。

（議事の運営）

第 7 条 委員会の会議は、委員の半数以上の出席がなければ開くことができない。ただし、緊急その他やむを得ない理由があるときはこの限りでない。

(関係者の出席等)

第8条 委員長は、委員会において必要があると認めるときは、関係者の出席を求めてその意見若しくは説明を聴き、又は関係者から必要な資料の提出を求めることができる。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、健康福祉局において処理する。

(その他)

第10条 本要綱に定める他、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附 則

(施行期日)

1 この要綱は、平成14年1月1日から施行する。

(経過措置)

2 この要綱の施行後最初の委員会の会議は、衛生局長が招集する。

附 則

この要綱は、平成18年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成23年5月24日から施行する。

《今月のトピックス》

- インフルエンザが急増しています。
- ツツガムシ病の報告がありました。
- 熱帯熱マラリアの報告がありました。
- 感染性胃腸炎は、ピークを過ぎましたが、まだ集団発生が見られています。

全数把握の対象

- 1 腸管出血性大腸菌感染症:1月は27日現在で1例の報告がありました。感染経路については不明です。腸管出血性大腸菌感染症の発生時の対応については、横浜市衛生研究所 HP をご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/infc_o157_guide.html
- 2 ツツガムシ病:1月は27日現在で1例の報告がありました。ツツガムシ病は、*Orientia tsutsugamushi* によるリケッチア症で、日本ではアカツツガムシ、タテツツガムシ、フトゲツツガムシの3種が媒介します。卵から孵化した幼虫は、一生に一度だけ哺乳動物に吸着し組織液を吸います。吸着時間は1～2日で、菌の動物への移行にはおおよそ6時間以上が必要です。ツツガムシのリケッチアの保菌率は0.1～3%である。タテツツガムシ、フトゲツツガムシは秋から初冬に孵化するので、この時期に関東～九州地方に多く発生が見られます。フトゲツツガムシは、寒冷に抵抗性があり、越冬後融雪後活動後再開するので、東北・北陸地方では春～初夏にも発生が見られます。発熱、刺し口、発疹を主要3徴候としますが、確定診断は血清診断で行われます。血清型は、Kato, Karp, Gilliam の標準型の他に Kuroki, Kawasaki などもあります。ツツガムシ病については、感染症研究所 HP をご参考ください。
http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g1/k02_13/k02_13.html
- 3 マラリア:1月は27日現在で1例の報告がありました。熱帯熱マラリアでした。エチオピアでの感染と思われます。熱帯熱、三日熱、卵形、四日熱の4種類に分かれますが、中でも熱帯熱マラリアは短期間で重症ないし死亡の危険があります。診断は、血液塗抹標本をギムザ染色し、光学顕微鏡で検査する方法が一般的です。治療薬については、熱帯病治療薬研究班 HP をご参考ください。
<http://www.med.miyazaki-u.ac.jp/parasitology/orphan/index.html>
マラリアについては、国立感染症研究所 HP をご参考ください。
http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k05/k05_04/k05_04.html
- 4 アメーバ赤痢:1月は27日現在で4例の報告がありました。
- 5 急性脳炎:1月は27日現在で2例の報告がありました。4歳と7歳で、インフルエンザのA型によるものでした。前シーズンのインフルエンザA(H1N1)pdmによる急性脳炎は、転帰を見ると、死亡6%、後遺症12%、治癒軽快が82%でした。国立感染症研究所 HP 参考 <http://idsc.nih.go.jp/disease/influenza/idwr10week41.html>
インフルエンザは、殆どが一過性の感染ですがいったん急性脳炎を発症すると非常に厳しい予後となります。今後もインフルエンザによる急性脳炎について、注意をしていく必要があります。
- 6 バンコマイシン耐性腸球菌感染症:1月は27日現在で2例の報告がありました。
- 7 麻疹:1月は27日現在の報告で3例の報告がありました。うち2例が成人例です。
- 8 劇症型溶血性レンサ球菌感染症 12月の追加報告が2例ありました。
- 9 クロイツフェルト・ヤコブ病:12月の追加報告が1例ありました。

定点把握の対象

平成 22 年 12 月 20 日から平成 23 年 1 月 23 日まで(平成 22 年第 51 週から平成 23 年第 3 週まで、ただし、基幹定点、性感染症については平成 22 年 12 月分の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

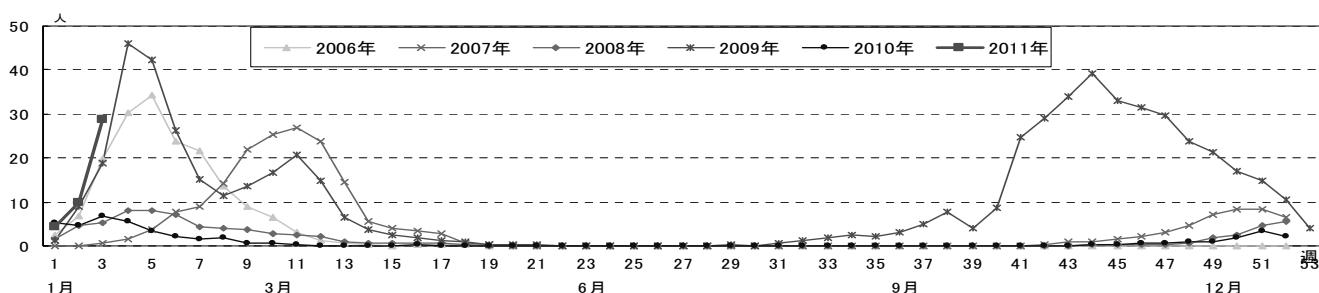
平成 22 年及び 23 年 週一月日対照表

第 51 週	12 月 20～ 26 日
第 52 週	12 月 27～1 月 2 日
第 1 週	1 月 3～ 9 日
第 2 週	1 月 10～ 16 日
第 3 週	1 月 17 ～23 日

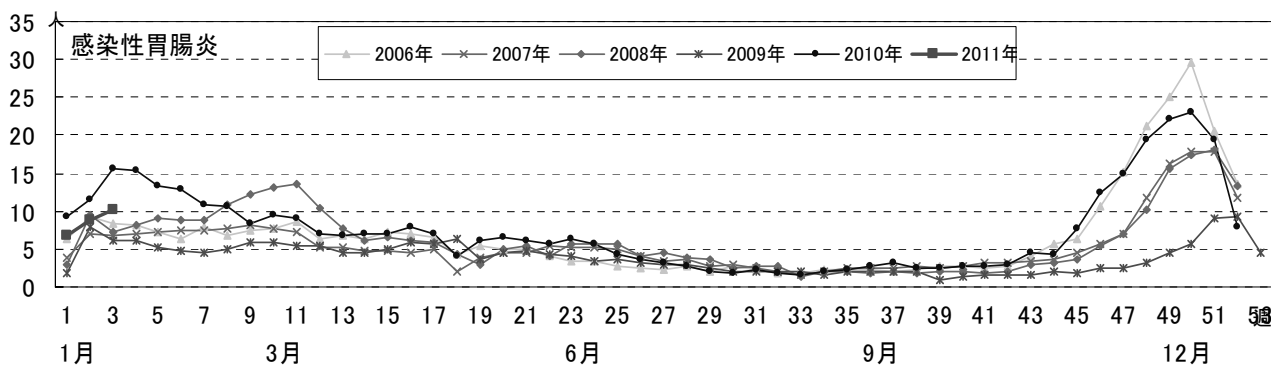
1 **インフルエンザ**: 市内の第 3 週は定点当たり 28.62 でした。流行のめやすである 1 を超えたのが第 50 週。注意報域を超えたのが、第 2 週。第 3 週は第 2 週の約 3 倍と、感染の広がり勢い

が見られます。行政区別では、磯子区 42.86、瀬谷区 39.86、神奈川区 36.33、泉区 35.29、緑区 34.71、都筑区 34.25、栄区 30.00 と 7 区が警報域です。中区の 5.75 を除く残りの 10 区もすべて注意報域です。神奈川県 27.57、東京都 24.54、全国では 26.41 でした。全国では宮崎県 64.49 を筆頭に、沖縄県 63.17 と大きな流行が見られています。関東でも群馬県 36.41、千葉県 36.38、埼玉県 34.29 と警報域で、市内でもこれからが流行の本番となると思われます。市内でのウイルスの変異調査の結果では、今年のワクチンは有効と思われます。

市内迅速キットの内訳は A 型が 96% と優勢ですが、B 型も 4% 認められ、18 区中 16 区で報告されています。市内の病原体定点からの検出は、A 新型 21 件、A 香港 7 件、B 型 2 件です。現在市内では 3 つのタイプのインフルエンザウイルスが循環していると思われます。



2 **感染性胃腸炎**: 市内の第 3 週は定点当たり 10.08 でした。第 50 週の 22.99 のピーク時は警報域でしたが、第 52 週には 7.90 と警報域を脱しています。行政区別では神奈川区 25.50 が警報域です。神奈川県 9.47、東京都 10.68、全国 9.16 と、全国的にもピークは脱していますが、市内では保育園や高齢者施設での集団も未だ報告されていますので、引き続き注意が必要な疾患です。



3 **性感染症**: 性感染症は、産婦人科系の 10 定点、および泌尿器科・皮膚科系の 17 定点からの報告に基づき、1 か月単位で集計されています。

12 月は、11 月に比べて全体としては大きな変化はありません。性器クラミジア感染症は、男性 19 例、女性 10 例でした。性器ヘルペスウイルス感染症は男性 8 例女性 11 例です。尖圭コンジローマは男性 5 例女性 3 例、淋菌感染症は男性 6 例女性 1 例でした。

4 **基幹定点**: 12 月はメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症は 12 例の報告がありました。平成 22 年の年間では 143 例でした。ペニシリン耐性肺炎球菌感染症は 12 月では 0 例。年間では 7 例。薬剤耐性緑膿菌感染症は、12 月は 0 例。年間でも 0 例でした。

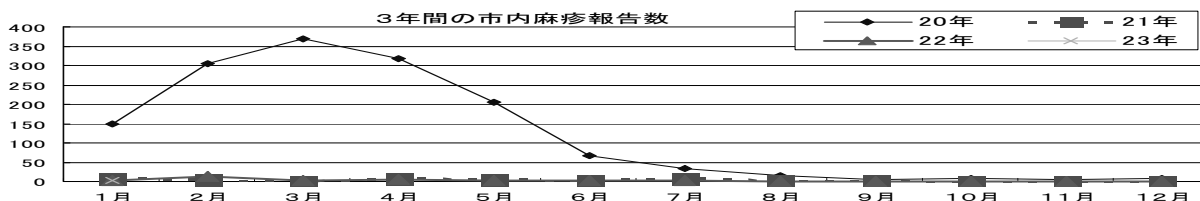
この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL: <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

《今月のトピックス》

- A 型肝炎の届出がありました。千葉県での感染と思われます。
- オウム病の届出がありました。感染経路は不明です。
- 劇症型溶血性レンサ球菌感染症の報告が2件ありました。
- インフルエンザの報告が減少しています。A型の報告が 1424 件、B型の報告が 1098 件と、B型の報告割合は増加しています。
- 流行性耳下腺炎の報告がこの時期にしては多めに推移しています。

全数把握の対象

- 1 **細菌性赤痢**:2月は 23 日現在で1例の報告がありました。インドでの感染と思われます。
- 2 **パラチフス**:2月は 23 日現在で1件の報告がありました。ミャンマーでの感染と思われます。
- 3 **A型肝炎**:2月は 23 日現在で1件の報告がありました。千葉県での経口感染と思われます。千葉県で複数報告のあった集団発生群とシークエンスで遺伝子が一致しています。A型肝炎についてはこちらをご参考ください。
横浜市衛生研究所HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hav1.html>
- 4 **オウム病**:2月は 23 日現在で1件の報告がありました。オウム病は、鳥類の排泄物に含まれるクラミジアによる感染症です。インフルエンザ様の症状を呈する異型肺炎等肺臓炎の型と、肺炎症状が顕著でない敗血症様症状を呈する型とがあります。高熱での突然発症が多いですが、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛、関節痛などが時にみられます。時には、髄膜炎、多臓器障害、ショック症状を呈し、死に至る可能性もある疾患です。
オウム病についてはこちらをご参考ください。
横浜市衛生研究所HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/psittacosis1.html>
- 5 **マラリア**:2月は 23 日現在で1件の報告がありました。ガーナでの感染と思われます。熱帯熱マラリアでした。
- 6 **ウイルス性肝炎**:2月は 23 日現在で1件の報告がありました。C型肝炎でした。C型肝炎は、急性肝炎を発症した後、30～40%ではウイルスが検出されなくなり、肝機能が正常化するが、残りの 60～70%はウイルスが残り HCV キャリアになり、多くの場合、急性肝炎から慢性肝炎へ移行します。慢性肝炎から自然寛解する確率は 0.2%と非常に稀で、10～16%の症例は初感染から平均 20 年の経過で肝硬変に移行します。肝硬変の症例は、年率 5%以上と高率に肝細胞癌を発症します。C型肝炎についてはこちらをご参考ください。横浜市衛生研究所HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hcv1.html> 急性ウイルス性肝炎はC型肝炎も含めてすべて届出の対象です。届出基準と届出様式は横浜市衛生研究所HPからご利用ください。
届出基準 <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/infection/pdf/kijun/go02.pdf>
届出様式 <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/infection/pdf/yousiki/go02.pdf>
- 7 **劇症型溶血性レンサ球菌感染症**:2月は 23 日現在で2件の報告がありました。1件は創傷感染によるものでした。1件が扁桃腺炎による感染でした。劇症型溶血性レンサ球菌感染症についてはこちらをご参考ください。
国立感染症研究所HP http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g2/k02_46/k02_46.html
- 8 **急性脳炎**:2月は 23 日現在で2件の報告がありました。1件はインフルエンザB型、1件は原因不明です。
- 9 **麻疹**:2月は 23 日現在で1件の報告がありました。10 歳の方です。きょうだいからの感染と思われます。ワクチン接種歴はありませんでした。ウイルスの genotype は D9 でした。平成 20 年には市内では 1485 人の届出がありましたが、平成 21 年には 43 人、平成 22 年には 32 人と激減しています。また平成 22 年には 30 件程度の取り下げもみられています。平成 23 年に入って4人の届出があり、2人にPCRで麻疹ウイルスが確認されていますが、一人がフィリピンでの感染で、もう一人はそのきょうだいの感染でした。麻疹についてはこちらをご参考ください。
横浜市衛生研究所HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/measle1.html>



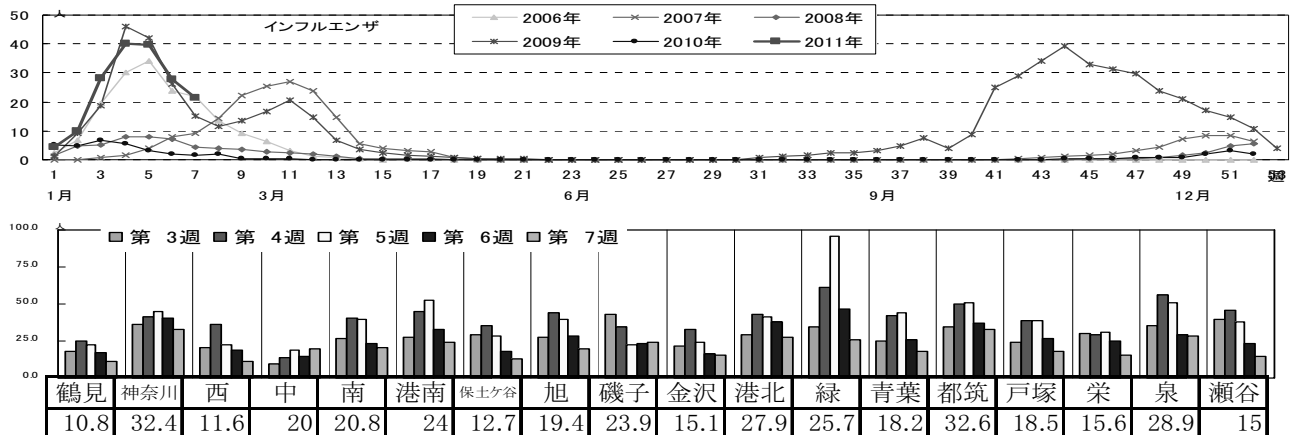
定点把握の対象

平成 23 年 1 月 17 日から 2 月 20 日まで(平成 23 第 3 週から第 7 週まで。ただし、性感染症については平成 23 年 1 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

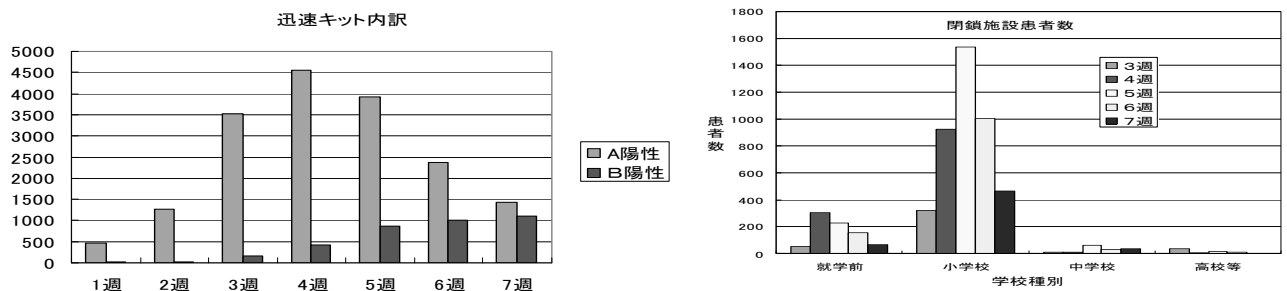
平成 23 年 週一月日対照表

第 3 週	1 月 17～23 日
第 4 週	1 月 24～30 日
第 5 週	1 月 31～ 2 月 6 日
第 6 週	2 月 7～13 日
第 7 週	2 月 14～20 日

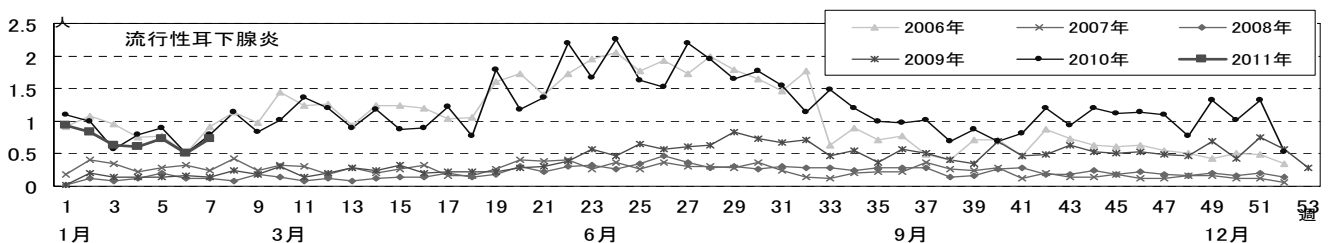
1 **インフルエンザ**:第7週は定点あたり 21.27 でした。第6週の 27.64 より低下しています。定点あたり 30 を超えた行政区は、都筑区(32.63)、神奈川区(32.40)のみでした。神奈川県では 21.92、川崎市は 21.78、全国 16.35、東京都 16.28 でした。



定点医療機関の協力で行われている迅速キットの内訳ですが、第7週はA型 1424 件、B型 1098 件と、43%が B型でした。施設閉鎖については、第7週では、33 施設、570 人と、減少傾向です。



2 **流行性耳下腺炎**:第7週は定点当たり 0.72 でした。過去5年との比較では、高めに推移しています。神奈川県は 0.62、川崎市は 0.52、全国 0.98、東京都 0.28 です。



3 **性感染症**:性感染症は、産婦人科系の 10 定点、および泌尿器科・皮膚科系の 17 定点からの報告に基づき、1 か月単位で集計されています。1 月は性器クラミジアは男性 22 人女性 16 人でした。性器ヘルペスウイルス感染症は、男性 5 人女性 8 人でした。尖圭コンジローマは男性 7 人女性 2 人でした。淋菌感染症は男性 12 人女性 2 人でした。

4 **基幹定点**:週報では、第 4～6 週に、マイコプラズマ肺炎が 4 件報告されています。月報では 1 月はメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が 14 例、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症は 0 例、薬剤耐性緑膿菌感染症は 0 例でした。2 月から薬剤耐性アシネトバクター感染症が 5 類の基幹定点の報告に追加されています。3 月からの届出に反映される予定です。届出基準、報告用紙については横浜市衛生研究所HPをご参考ください。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。

横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL: <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

平成 23 年 3 月期

横浜市感染症発生動向調査委員会報告

《今月のトピックス》

- コレラの報告の届出がありました。海外での感染と思われます。
- A 型肝炎の届出がありました。
- インフルエンザの流行がまだ継続しています。
- 平成 23 年 2 月から報告対象になったアシネトバクター感染症の報告はありませんでした。
- 大震災後の混乱で、第 11 週の定点報告状況に影響が及んだ可能性があります。

全数把握の対象

- 1 **コレラ**:3月は 24日現在で1例の報告がありました。O1エルトル小川型でした。フィリピン(セブ島)での感染と思われます。コレラの定義は、コレラ毒素(CT)産生性の *Vibrio cholerae*O1 及び O139 が確認された症例です。O1 または O139 抗血清に非凝集性の場合、*V.cholerae* non-O1,non-O139 あるいは non-agglutinable *Vibrio*(ナグビブリオ)と総称されます。1961 年から今日まで続いている第7次世界流行のコレラはエルトル型によるものですが、インドベンガル湾で最初に見つかった、*V.cholerae* O139 はインド亜大陸や東南アジアでも分離されています。ナグビブリオによる下痢症は、感染症法上の5類感染症である感染性胃腸炎として、また食品衛生法上の食中毒としての届出になります。コレラについてはこちらをご参考ください。
横浜市衛生研究所 HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/cholera1.html>
- 2 **細菌性赤痢**:タンザニアでの感染と思われます。
渡航予定のある方は、事前に厚生労働省検疫所 FORTH(海外で健康にお過ごしいただくための情報サイト)のご利用をお勧め致します。FORTH(For travelar's health) <http://www.forth.go.jp/>
- 3 **腸管出血性大腸菌感染症**:3月は24日現在で2件の報告がありました。感染経路は不明です。
- 4 **A 型肝炎**: A 型肝炎ウイルスは、糞口感染で、約1ヶ月の潜伏期間を経て発病しますが、感染後約1週間～発病後数ヶ月の長期間ウイルスを排出しますので、2次感染対策が重要です。小児の約 90%は不顕性感染ですが、年令と共に顕性感染の割合が増え、成人の 90%が発症し、時に劇症肝炎や死亡例まで見られる疾患です。全国での報告数は、2007 年～2009 年までは 54 件、60 件、38 件と散發程度でしたが、2010 年では春先から A 型肝炎の全国的な報告増が見られ、1年間で 346 件の報告がありました。A 型肝炎の血清型は1種類ですが、遺伝子型は I～VI型に分類され、人からは主に I、III型が検出されます。昨年の流行状況の全国的な調査では、従来日本に常在していた I A 型に加え、フィリピンと関連のある genotype I A 型、韓国で大流行した genotype III A 型の3つのクラスターが確認されました。今年も引き続き注意が必要です。
A 型肝炎についてはこちらをご参考ください。
横浜市衛生研究所 HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hav1.html>
国立感染症研究所 HP <http://idsc.nih.go.jp/iasr/31/368/tpc368-j.html>
- 5 **レジオネラ**:3月は24日現在で2件の報告がありました。感染経路は不明です。レジオネラについてはこちらをご参考ください。横浜市衛生研究所 HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/legionellosis1.html>
- 6 **麻疹**:3月は24日現在で2件の報告がありました。2件とも臨床診断での届出でした。1件は MR ワクチン接種 3週間後でした。数年前の首都圏での麻疹の大流行と、強化された予防接種制度の影響で、修飾麻疹の割合が増えていると思われますので検査診断が重要です。昨年の市内の麻疹の届けは当初 62 件でしたが、検査結果や臨床経過等の判断で 30 件の取り下げが見られ、最終的に 32 件となりました。中には、届出当初は麻疹 IgM 抗体陽性でしたがその後の経過で伝染性紅斑と判断され取り下げになった件もあります。成人の伝染性紅斑は典型よりは重症感が強く、誤診になる可能性があります。IgM 抗体は、突発疹や伝染性紅斑等ウイルス疾患の交差反応で弱陽性を示しますので注意が必要です。万が一、IgM 抗体偽陽性で麻疹と誤診されますと、その後の麻疹の定期予防接種を受けない等の不利益も予想されますので、検査診断が重要です。衛生研究所では、2010 年4月から、適切な時期に採取された検体の検査を行い、3件の麻疹ウイルスが確認いたしました。3件とも輸入例で、インドの genotype D8 が1件と、フィリピンの genotype D9 が2件です。
麻疹についてはこちらをご参考ください。
横浜市衛生研究所 HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/measle1.html>

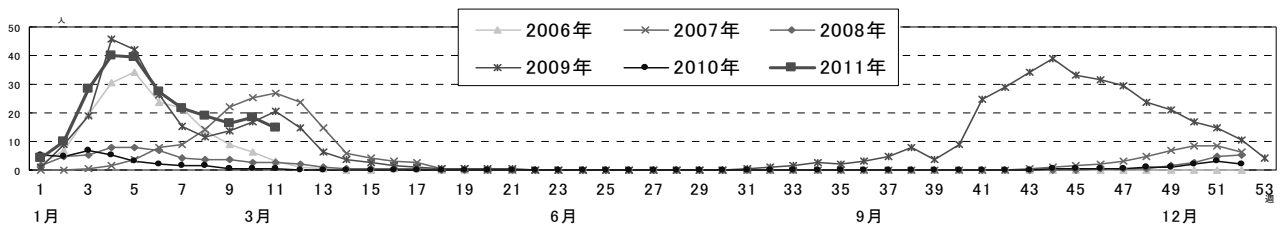
定点把握の対象

平成23年2月14日から3月20日まで(平成23年第7週から第11週まで。ただし、性感染症については平成23年2月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

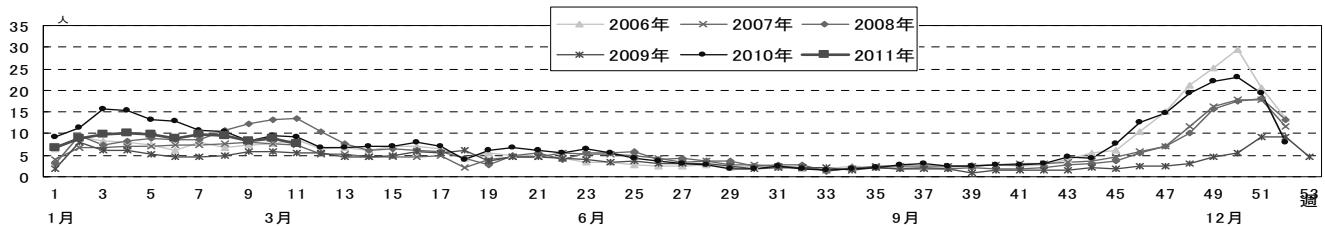
平成23年 週一月日対照表

第7週	2月14～20日
第8週	2月21～27日
第9週	2月28～3月6日
第10週	3月7～13日
第11週	3月14～20日

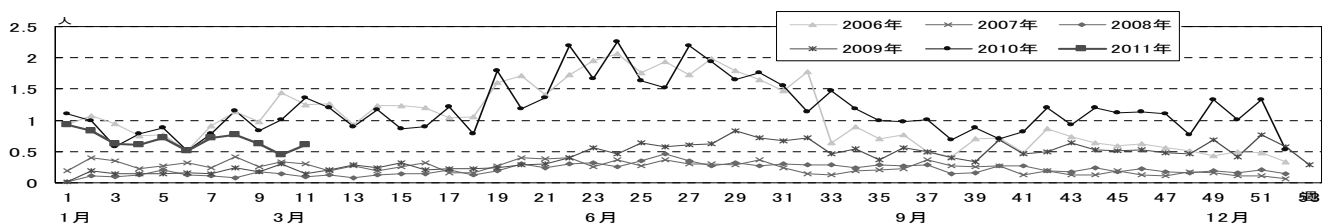
- 1 **インフルエンザ**:第11週は定点あたり15.00でした。第10週の18.29より微減していますが、3月11日(金)から本日に至る公共交通機関の乱れと、14日(月)から始まった計画停電等の影響もあり、定点医療機関の診療時間が影響している可能性もありますので、楽観は出来ないと考えられます。計画停電の無い西区では、第10週は9.00、第11週は17.60と倍増しています。全ての定点医療機関にご協力をいただいている迅速キットの内訳では、A型302件、B型1276件、A型B型共に陽性が10件でした。全国では17.25、神奈川県では16.52、川崎市では16.91、東京都では15.28でした。また、薬剤耐性を示唆する遺伝子変異が、今シーズンでは、A新型が3件、A香港が1件認められました。B型では、ビクトリア系統が検出されていましたが、山形系統も1件検出されています。



- 2 **感染性胃腸炎**:第11週は定点当たり7.56でした。行政区別では、神奈川区は第11週は16.40と高めです(第10週は22.00)。全国では9.38、神奈川県6.86、川崎市8.09、東京都8.17でした。



- 3 **流行性耳下腺炎**:第11週は定点当たり0.61でした。過去5年との比較では、流行した2006年、2010年に非比較するとやや落ち着いてきた感じです。全国では0.97、神奈川県0.51、川崎市0.45、東京都0.25でした。



- 4 **性感染症**:性感染症は、産婦人科系の10定点、および泌尿器科・皮膚科系の17定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。2月は、性器クラミジア感染症は男性18件、女性8件でした。性器ヘルペス感染症は、男性5件、女性7件でした。尖圭コンジローマは、男性5件、女性1件でした。淋菌感染症は、男性10件、女性0件でした。
- 5 **基幹定点週報**:細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告は、今年に入って1件もありません。マイコプラズマ肺炎は、第4～6週に計4件ありました。
- 6 **基幹定点月報**:2月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症3件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症0件、薬剤耐性緑膿菌感染症1件、薬剤耐性アシネトバクター感染症0件でした。尚アシネトバクター感染症は、この2月分から報告対象になった新しい感染症です。多剤耐性アシネトバクターにつきましては、こちらをご参考ください。
横浜市衛生研究所 HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/acinetobacter1.html>
国立感染症研究所 HP <http://idsc.nih.go.jp/iasr/31/365/inx365-j.html>

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

《今月のトピックス》

- 東京都で麻しんの報告数が増加しています。横浜への波及が心配されます。
- 風しんの報告が4例見られました。4例とも成人例でした。
- インフルエンザによる学級閉鎖が4月に2件見られました。流行の状態は横ばいです。

全数把握の対象

- 1 腸管出血性大腸菌感染症:**1例の報告がありました。感染源は不明です。感染経路については不明です。腸管出血性大腸菌感染症の発生時の対応については、横浜市衛生研究所 HP をご参考ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/infc_o157_guide.html
- 2 マラリア:**1例の報告がありました。熱帯熱マラリアでした。ギニア共和国での感染と思われます。世界的に耐性マラリアが問題になっています。治療薬については、熱帯病治療薬研究班 HP をご参考ください。
<http://www.med.miyazaki-u.ac.jp/parasitology/orphan/HTML/page5.html>
マラリアについては、国立感染症研究所 HP をご参考ください。
http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k05/k05_04/k05_04.html
- 3 麻しん:**4例の報告がありました。麻しんの排除を目指して、麻しん患者が減少していくなかで、検査診断は非常に重要です。麻しん特異的 IgM 抗体検査やペア血清による特異的 IgG 抗体検査等抗体検査が多く用いられていますが、疫学調査のためには、ウイルスの遺伝子型等性状が把握できるウイルス分離や、PCR のような遺伝子診断が望ましく、検査のためには、感染の早い時期に血液、咽頭ぬぐい液、尿といった検体を採取することが求められます。麻しん排除のためには全ての年齢で 95%以上の抗体保有率が求められますが、平成 21 年度の全国感染症流行予測調査ではこのレベルに達していないのは、0~1歳を除くと、10歳、15歳のみであり、Ⅲ期、Ⅳ期の予防接種の効果が現れています。麻しんについては、横浜市衛生研究所 HP をご参考ください。
<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/measle1.html>
市内の麻しん届出数は、平成 20 年は 1485 例、平成 21 年 43 例、平成 22 年 32 例でした。平成 19 年、平成 20 年と、東京都を発として、首都圏に広く麻しんの流行が見られ、平成 20 年には全国麻しん届出数は 11015 例でしたが、平成 21 年には 739 例、平成 22 年には 455 例と続けて減少しました。日本国内の状況では、今年は第 16 週までに 146 人の患者が報告されています。東京都が 51 人と約3分の1を占めています。今年になって、東京都で検出された麻しんウイルスは 24 件 (D4 型 16 件、D9 型 8 件) で、D4 は欧州から (1 月)、D9 は東南アジアからの輸入例でした。現在、渡航歴の無い患者からも検出されていて、輸入例からの広がりが危惧されます。横浜市への影響も、監視していく必要があります。東京都の麻しんウイルス検出状況につきましては、国立感染症研究所 HP をご参考ください。
<http://idsc.nih.go.jp:80/iasr/rapid/pr3752.html>
- 4 風しん:**4例の報告がありました。4例とも成人例です。2010 年、風しんの届出は、全国では 89 例、横浜市内は 3 例でした。今後の横浜市の風しん発生状況に注意が必要です。風しんについては、横浜市衛生研究所 HP をご参考ください。
<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/rubella1.html>
- 5 HIV 感染症:**4例の報告がありました。2例は男性の同性間性的接触によるものです。2例は女性の異性間性的接触によるものです。全国でも数年来、男性の同性間性的接触での感染が多く見られています。HIV 感染症については、横浜市衛生研究所 HP をご参考ください。
<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hiv.html>

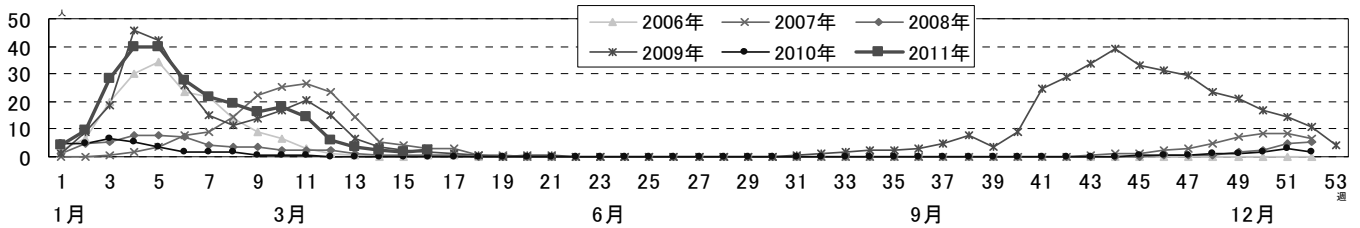
定点把握の対象

平成 23 年 週一月日対照表

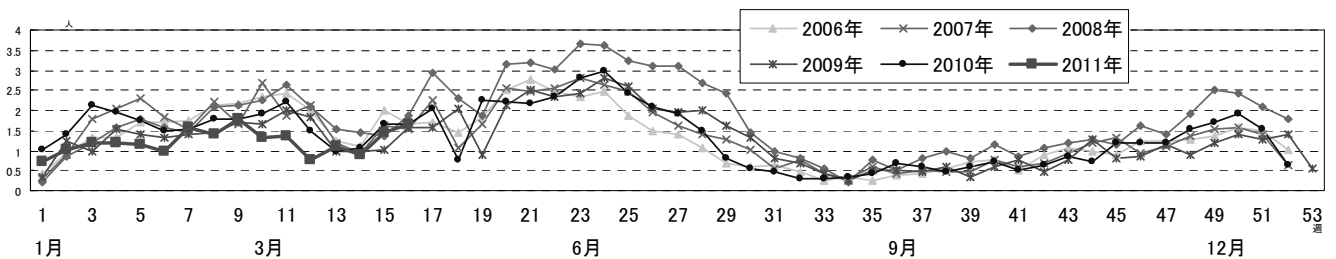
第 12 週	3 月 21～27 日
第 13 週	3 月 28 日～4 月 3 日
第 14 週	4 月 4～10 日
第 15 週	4 月 11～17 日
第 16 週	4 月 18～24 日

平成 23 年 3 月 21 日から 4 月 24 日まで(平成 23 年第 12 週から第 16 週まで。ただし、性感染症については平成 23 年 3 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

- 1 **インフルエンザ**:第 16 週は定点当たり 2.35 で、第 15 週の定点あたり 2.04 に比べ微増しています。全国 7.56、神奈川県 3.41、東京都 5.43 です。全国の第 15 週は 6.42 であり、全国的にも広く微増しています。長野県 25.51、福井県 19.47、石川県 17.29 が高めです。市内行政区別では瀬谷区 8.50、金沢区 3.57、戸塚区 3.56 が高く、年齢層では9割が 20 歳未満です。4月に入り、市内ではインフルエンザによる学級閉鎖が、2つの小学校から報告されていることもあり、引き続き低年齢の集団感染には注意を要します。迅速キットの内訳は A 型 17 件、B 型 230 件です。

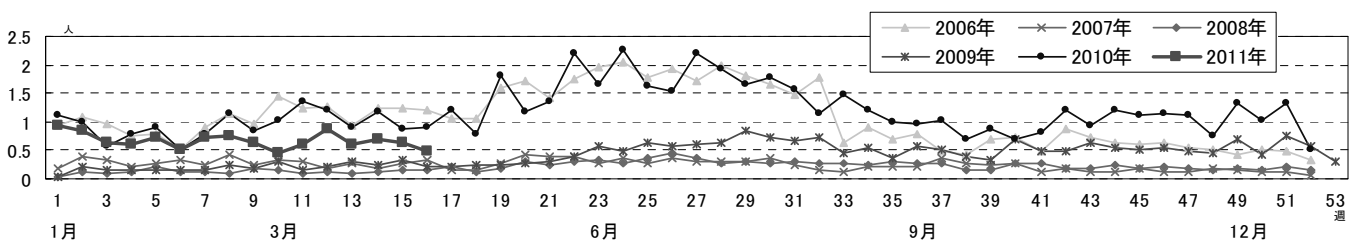


- 2 **A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎**:第 16 週は定点あたり 1.68 です。全国 2.33、神奈川県 1.83、東京都 2.76 です。行政区別では、瀬谷区 6.25、港北区 3.29、緑区 3.25、泉区 3.00 が高めです。例年初夏からの流行が見られるので、今後の動向に注意が必要です。



- 3 **感染性胃腸炎**:第 16 週は定点当たり 6.41 です。全国 9.30、神奈川県 6.72、東京都 9.17 です。鹿児島県 18.18、富山県 17.59、愛媛県 17.41、福井県 17.27、大分県 15.69 が比較的高めです。行政区別では神奈川区 14.50、戸塚区 11.80 が高めです。なお、4 月の定点からの検出状況は、3 検体中 A 群ロタウイルス 2 件でした(ノロは検出なし)。

- 4 **流行性耳下腺炎**:第 16 週は定点当たり 0.49 です。全国は 0.78、神奈川県 0.39、東京都 0.23 です。2010 年は市内では5年ぶりの流行の年となりましたが、今年に入り漸減し、落ち着いてきています。



- 5 **性感染症**:性感染症は、産婦人科系の 10 定点、および泌尿器科・皮膚科系の 17 定点からの報告に基づき、1 か月単位で集計されています。3 月は性器クラミジア感染症が男性 19 件、女性 13 件。性器ヘルペス感染症が男性 5 件女性 7 件。尖圭コンジローマが男性 6 件、女性 2 件。淋菌感染症が男性 6 件女性 1 件でした。

- 6 **基幹定点週報**:細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告は、今年に入って1件もありません。マイコプラズマ肺炎は、第4～6週に計4件ありました。

- 7 **基幹定点月報**:3 月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症男性 13 件女性 8 件計 21 件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 0 件、薬剤耐性緑膿菌感染症男性 1 件計 1 件、薬剤耐性アシネトバクター感染症 0 件でした。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。

横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

《今月のトピックス》

- 腸管出血性大腸菌感染症の食中毒がありました。
- 風しんの報告が増加しています。
- 麻しんの流行に注意が必要です。
- 伝染性紅斑で、栄区が警報レベルとなっています。

全数把握の対象

- 1 **細菌性赤痢**:1件の報告がありました。菌種は Shigella.sonnei です。渡航先(カンボジア王国)での感染です。
- 2 **腸管出血性大腸菌感染症**:7件の報告がありました。うち2件(1件は抗体で O111 陽性、もう1件は O157 VT1 VT2)は焼肉チェーン店関連の食中毒です。また、他の5件では、10代男性2名、30代男性、60代女性から O157VT1VT2、60代男性から O121(HUS を発症)がそれぞれ検出されています。感染経路については調査中です。
- 3 **A 型肝炎**:1件の報告がありました。国内経口感染例の9割は、魚介類によるものと言われています。ただ、手洗いの不徹底による人から人への感染の恐れもあるので、十分な手洗いが予防には重要です。
- 4 **レジオネラ症**:肺炎型2件の報告がありました。感染経路は不明です。
- 5 **後天性免疫不全症候群**:4件(3件は無症候期)の報告があり、すべて国内の同性間接触によるものです。厚生労働省エイズ動向委員会(5月23日)の年間報告(確定値)で、昨年1年間の全国における新たな AIDS 患者報告数は 469 件で、08 年、09 年の 431 件を上回り、過去最多を更新したことが明らかになりました。今後も、市内での推移を注視するとともに、感染予防と検査による早期発見・治療が重要です。
- 6 **梅毒**:1件(早期顕性梅毒1期)の報告がありました。国内の異性間接触によるものです。
- 7 **アメーバ赤痢**:腸管アメーバ症2件の報告がありました。国内での性的接触が推定されています。
- 8 **劇症性溶血性レンサ球菌感染症**:1件の報告がありました。
- 9 **風しん**:5月は5件の報告がありました。横浜市の4~5月の報告件数は計 10 件で、昨年度の報告総数3件をすでに上回っています。東京都、川崎市等近隣地域での流行は見られません。風しんは、麻しんと非常によく似た症状を呈する場合があります。10 件のうち6件については、風しんと麻しんの両方の可能性が疑われたため、麻しん PCR 検査を実施したところ、6件全例が陰性となりました。
- 10 **麻しん**:7件の報告がありました。乳幼児2件の他は成人の感染でした。7件のうち、乳幼児2件と成人2件で予防接種歴がありましたが、他は不明でした。6件について麻しん PCR 検査を実施しており、うち3件は陰性、3件は検査中です。東京都での流行は、17 週 20 件、18 週 8 件、19 週 12 件、20 週 19 件と推移しています。なお、現在、ヨーロッパを中心に流行がみられ、輸入例についても注意が必要です。
麻しん患者数の減少に伴って、全数検査が重要になっています。診察時に麻しんを強く疑った場合、横浜市の検査診断フローに基づき、麻しん PCR 検査の対応と、麻しん抗体検査をお願いします。また、できるだけ早く発生届、患者連絡票の提出をお願いいたします。

※各感染症については、横浜市衛生研究所 HP をご参考ください。
<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/>

定点把握の対象

- インフルエンザ:**今年シーズンは、今年第11週にピーク(定点当り40.05)を示しましたが、その後漸減し、第18週0.54、第19週0.31、第20週0.27で、流行の目安である1.0を下回り、ほぼ収束しています。
- 水痘:**第17週では瀬谷区で定点当り4.00、18週に緑区4.00、19週に旭区4.33、瀬谷区4.75と注意報レベルとなりましたが、20週では各区とも注意報レベルの区はなく、市全体でも1.77と落ち着いています。20週では、全国1.56、県域(横浜、川崎、相模原を除く神奈川県)1.35、川崎市0.94、東京都1.61でした。
- 伝染性紅斑:**第20週では、栄区で定点当り4.00と、警報レベルを上回りました。他に警報レベルの区は無く、市全体でも0.65と落ち着いています。例年初夏から流行が見られる疾患ですので、今後の推移に注意が必要です。20週では、全国0.92、県域0.76、川崎市0.73、東京都0.88でした。
- 性感染症:**性感染症は、産婦人科系の10定点、および泌尿器科・皮膚科系の17定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。4月では、性器クラミジア感染症は男性が14件、女性が12件でした。性器ヘルペス感染症は、男性が6件、女性が14件です。尖圭コンジローマは、男性が11件、女性が2件でした。淋菌感染症は、男性が8件でした。
- 基幹定点週報:**クラミジア肺炎の報告が1件(3歳女児)ありました。細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎の報告は今年に入って1件もありません。マイコプラズマ肺炎は、第4～6週の計4件のみで、その後は報告されていません。
- 基幹定点月報:**4月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症10件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

第16週	4月18～24日
第17週	4月25～5月1日
第18週	5月2～8日
第19週	5月9～15日
第20週	5月16～22日

疾病	警報		注意報
	開始 基準値	終息 基準値	基準値
インフルエンザ	30	10	10
咽頭結膜熱	3	1	なし
A群溶血性連鎖球菌咽頭炎	8	4	
感染性胃腸炎	20	12	
水痘	7	4	4
手足口病	5	2	なし
伝染性紅斑	2	1	
百日咳	1	0.1	
ヘルパンギーナ	6	2	
流行性耳下腺炎	6	2	3
急性出血性結膜炎	1	0.1	なし
流行性角結膜炎	8	4	

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。

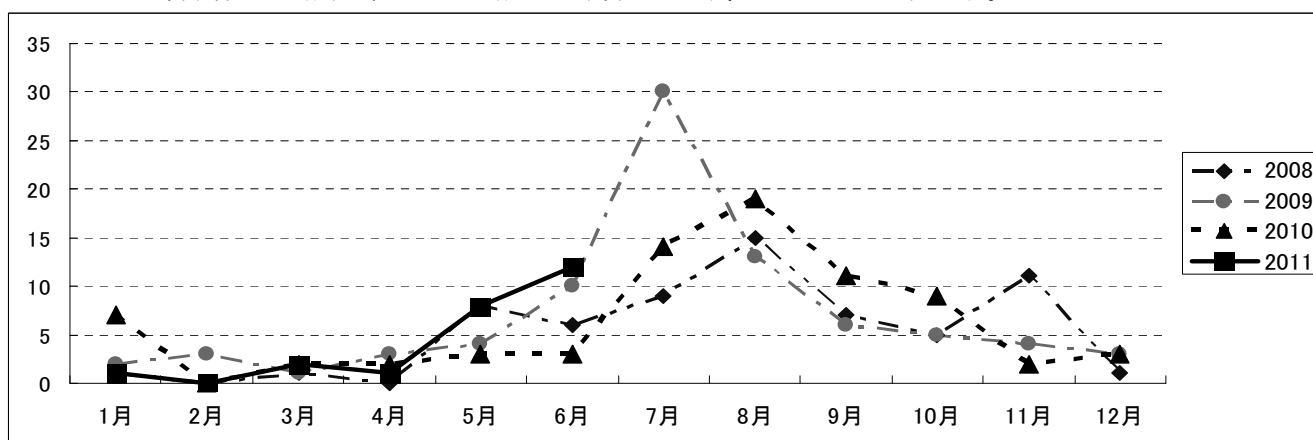
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/>

《今月のトピックス》

- 腸管出血性大腸菌感染症が増加しています。
- 咽頭結膜熱が、磯子区、緑区で警報レベルです。
- 水痘が、鶴見区、緑区、瀬谷区で注意報レベルです。
- 伝染性紅斑が、中区、港南区、青葉区、栄区で警報レベルです。
- 手足口病の流行に注意が必要です。

全数把握の対象

- 細菌性赤痢:**1 件の報告がありました。菌種は *Shigella sonnei* です。国内での感染が推定されています。
- 腸管出血性大腸菌感染症:**12 件(O157VT1VT2 が 8 件(うち 3 件は家族内感染)、O157VT2 が 2 件、O26VT1 が 1 件、O26VT1VT2 が 1 件) の報告がありました。特定の飲食店等での集団感染はありませんでしたが、家族内での発生が見られ、家庭内での調理や食事にも注意が必要です。例年夏季に感染者数のピークを迎えますが、過去 3 年間と比較して今年の感染者数の増加は目立っており、今後の注意が必要です。本症は特に抵抗力の弱い乳幼児や高齢者で重症化することがあります。通常、菌は家畜の腸内に存在し、新鮮な肉を購入しても表面に菌が付着している可能性があり、生肉を切った包丁やまな板の洗浄・消毒や、焼肉の生肉を取る箸と食べる箸を区別する等の予防対策が重要です。また菌は熱に弱いので、肉は十分に加熱(中心部まで 75℃で 1 分間以上加熱)し、生肉や加熱が不十分な肉を食べないことが大切です。



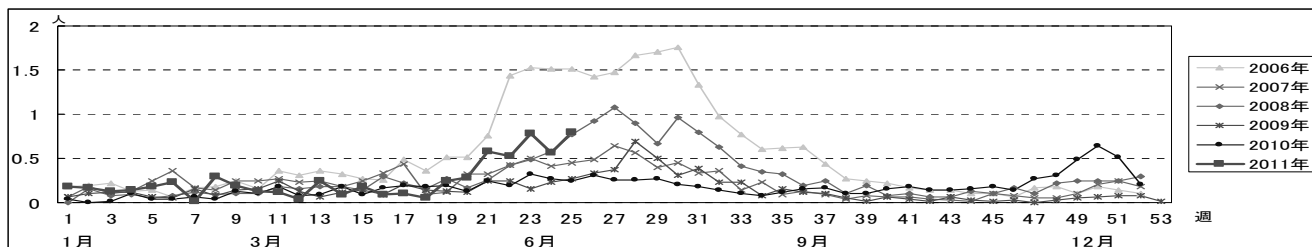
- パラチフス:**1 件の報告がありました。インドでの感染が推定されています。
- A 型肝炎:**1 件の報告がありました。ウズベキスタンでの感染が推定されています。
- マラリア:**1 件の報告がありました。卵形マラリアで、ザンビア共和国のチパタ(東部州の州都)での感染が推定されています。
- 後天性免疫不全症候群:**3 件(無症候期)の報告がありました。
- 麻しん:**4 件の報告(成人 3 件、幼児 1 件)がありました。いずれも臨床診断例です。近隣の自治体では、2011 年 1 月～6 月 22 日までに東京都の麻しん累積患者数が 148 件にのぼり、流行が続いているので、今後の状況に引き続き注意が必要です。対象者への確実な予防接種の実施が望まれます。

※各感染症については、横浜市衛生研究所 HP をご参考ください。
<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/>

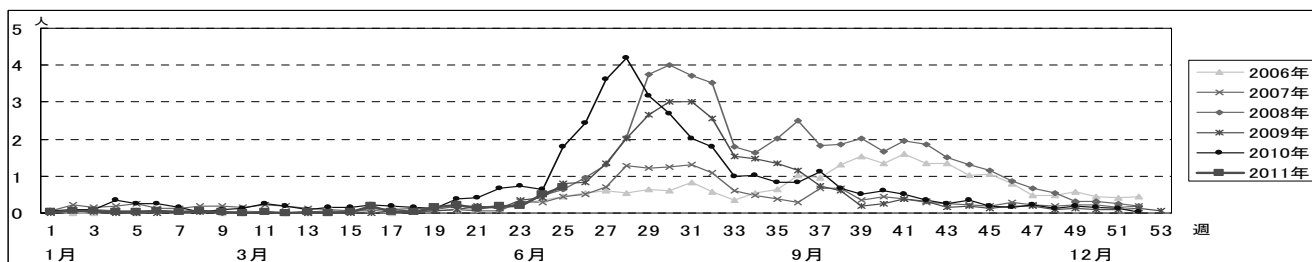
定点把握の対象

- 1 **咽頭結膜熱**:第25週では、磯子区で定点当たり5.75、緑区で4.00と、警報レベルを上回りました。磯子区では5週間警報レベルが持続しています。市全体では0.79と警報レベルに至っていませんが、漸増しており、例年初夏から流行が見られる疾患ですので、今後の推移に注意が必要です。25週では、全国0.77、県域(横浜、川崎、相模原市除く)0.68、川崎市0.44、東京都0.75でした。

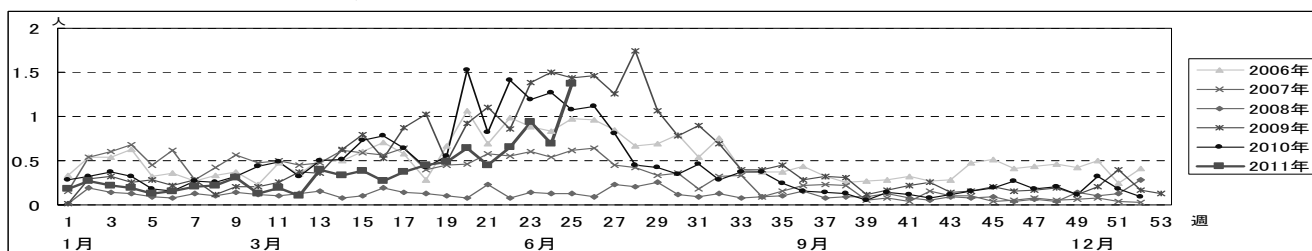
第21週	5月23～29日
第22週	5月30～6月5日
第23週	6月6～12日
第24週	6月13～19日
第25週	6月20～26日



- 2 **水痘**:第25週では、鶴見区4.20、緑区5.40、瀬谷区4.75で注意報レベルとなっています。緑区では3週間注意報レベルが持続しています。市全体では2.07と3週間連続で低下していますが、例年初夏に流行が見られる疾患ですので、今後の推移に注意が必要です。25週では、全国1.65、県域2.88、川崎市1.09、東京都1.21でした。
- 3 **手足口病**:第25週では警報レベルの区は無く、市全体でも落ち着いていますが、市全体の24週0.51から25週0.70とやや増加しており、この立ち上がりのパターンは2008年と酷似しています。2008年は29、30週頃(7月下旬)に流行のピークを迎えたので、今後の警戒が必要です。25週では、全国4.27(主に西日本での流行)、県域0.36、川崎市1.19、東京都1.34でした。



- 4 **伝染性紅斑**:第25週では、中区5.50、港南区2.20、青葉区2.17、栄区4.25と警報レベルを上回りました。栄区では6週間警報レベルが持続しています。市全体では1.38ですが、24週の0.69からほぼ倍増しており、例年初夏から流行が見られる疾患ですので今後の推移に注意が必要です。25週では、全国1.47、県域1.33、川崎市1.69、東京都1.37でした。



- 5 **性感染症**:性感染症は、産婦人科系の10定点、および泌尿器科・皮膚科系の17定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。5月では、性器クラミジア感染症は男性が19件、女性が17件でした。性器ヘルペス感染症は、男性が7件、女性が9件です。尖圭コンジローマは男性7件でした。淋菌感染症は、男性が15件、女性が1件でした。
- 6 **基幹定点週報**:5月は第21週に無菌性髄膜炎の報告が1件(4歳男児)、マイコプラズマ肺炎が第25週に1件(8歳女児)ありました。マイコプラズマ肺炎は、第4～6週に4件報告されて以来の報告です。細菌性髄膜炎は今年に入って1件もありません。クラミジア肺炎は第14週に1件報告されたのみです。
- 7 **基幹定点月報**:5月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症6件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

この報告とデータの詳細については、下記に掲載されていますので、御参照覧ください。
 横浜市衛生研究所ホームページ URL:<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/>

《今月のトピックス》

- 手足口病が横浜市内で大流行しています。
- ヘルパンギーナが港北区、緑区、青葉区、都筑区、瀬谷区で警報レベルです。
- 流行性耳下腺炎が緑区、泉区で注意報レベルです。
- 咽頭結膜熱が磯子区、緑区で、伝染性紅斑が栄区で警報レベルとなっていますが、市全体の流行は下降傾向です。

全数把握の対象

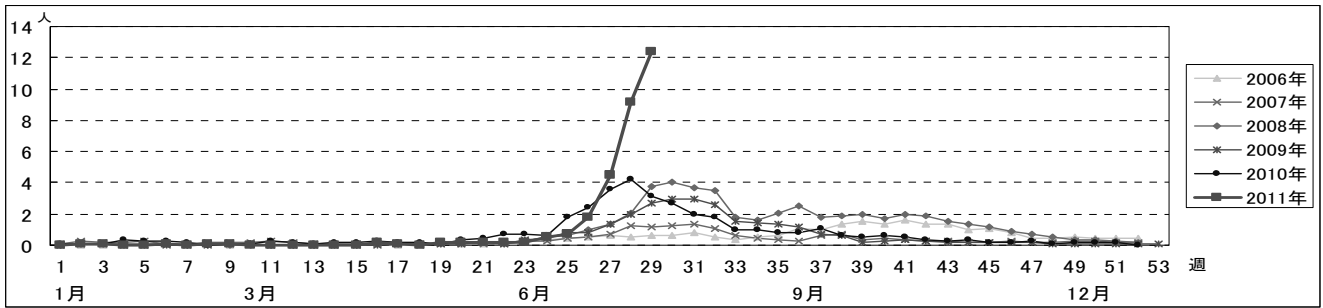
- 1 **腸管出血性大腸菌感染症**:6 件 (O157VT2 が 4 件、O26VT1VT2 が 1 件、O157VT 不明が 1 件) の報告がありました。家族内接触感染が 3 例、認められました(1 例は 6 月報告例の家族内二次感染)。特定の飲食店等での集団感染はありませんでした。6 月の報告数 12 件より減少しましたが、例年夏季に感染者数のピークを迎えるので 8 月も引き続き注意が必要です。8 月は食品衛生月間です。腸管出血性大腸菌感染症も含めた食中毒に注意しましょう。家庭でできる一般的な食中毒の予防法の 6 つのポイント(①新鮮な食材の購入 ②冷蔵・冷凍での食材保存 ③手洗いの励行、清潔な調理 ④肉・魚の十分な加熱 ⑤食事前の手洗いと調理後はすぐに食べる ⑥清潔な容器で保存し温め直すときは十分に加熱、長時間過ぎたものは捨てる)を心がけましょう。
- 2 **レジオネラ症**:肺炎型 1 件の報告がありました。感染経路は不明です。
- 3 **アメーバ赤痢**:腸管アメーバ症 7 件の報告がありました。4 件は日本国内での感染(性的接触 2 件、経口感染 1 件、感染経路不明 1 件)が推定されています。1 件はインドネシアでの経口感染、他の 2 件は感染経路・感染地域ともに不明でした。
- 4 **後天性免疫不全症候群**:3 件の報告がありました。1 件は無症候期(異性間性的接触:日本国内での感染)、もう 2 件は AIDS(どちらも異性間性的接触で、1 件は国内又はフィリピンでの感染、もう 1 件は国内での感染)でした。
- 5 **風しん**:2 件の報告がありました。どちらも予防接種歴なし。内 1 件は麻しん PCR 検査を実施したところ陰性であり、風しん IgM1.99 のため、風しんと診断されました。横浜市の 4~7 月の報告件数は計 12 件で、昨年の報告総数 3 件をすでに上回っています。東京都、川崎市等近隣地域での流行は見られません。風しんは、麻しんと非常によく似た症状を呈する場合があります。
- 6 **麻しん**:4 ヶ月児の 1 件の報告がありました。臨床診断例で、国内での感染が推定されています。ワクチン接種歴はありません。麻しん排除に向けて、積極的な疫学調査や検査が求められています。麻しんを疑った際には最寄の福祉保健センターにご相談ください。

※各感染症については、衛生研究所 H.P.をご参照ください。http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/

定点把握の対象

- 1 **咽頭結膜熱**:第 29 週では、磯子区で定点当たり 5.75 と、警報レベルを上回り、9 週間警報レベルが持続しています。緑区で 3.00 と 5 週警報レベルが持続しています。市全体では 0.90 と、流行は下降気味です。
- 2 **手足口病**:6 月から西日本で流行していましたが、徐々に横浜市内でも流行が始まり、第 29 週では横浜市全体で定点あたり 12.38 と、1995 年以来 16 年ぶりの大流行となっています。14 区で警報レベルとなっており、特に緑区では 42.60 と多くなっています。第 29 週では、県域(横浜、川崎、相模原市除く)4.25、川崎市 15.34、東京都 9.53 となっています。

平成 23 年 週一月日対照表	
第 25 週	6 月 20~26 日
第 26 週	6 月 27~7 月 3 日
第 27 週	7 月 4~ 10 日
第 28 週	7 月 11~ 17 日
第 29 週	7 月 18~ 24 日



なお、手足口病の原因ウイルスは、CA16 や EV71 が一般的ですが、今年の流行では CA6 が数多く検出されており、横浜市でも病原体定点から CA6 が検出されています。静岡県の報告¹⁾によると、今年 CA6 が検出された手足口病では、発熱率が高く、四肢や臀部に紅暈を伴う水疱性病変が出現するが、手掌や足底にはむしろ少なく、上腕、大腿部および臀部に高頻度に認める。また、口囲や頸部周辺にも皮疹を認める、などといった特徴が報告されています。また、大阪府では家族内感染が疑われる成人の手足口病患者が報告されています²⁾。(詳しくは下記ホームページをご参照ください。)感染経路は飛沫感染、接触感染、糞口感染であり、乳幼児への感染予防は手洗いの励行と排泄物の適正な処理が基本です。

1) IASR<速報>2011 年のコクサッキーウイルス A6 型感染による手足口病の臨床的特徴—静岡県 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/pr3784.html>

2) IASR<速報>コクサッキーウイルス A6 型による手足口病の成人例—大阪府 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/pr3786.html>

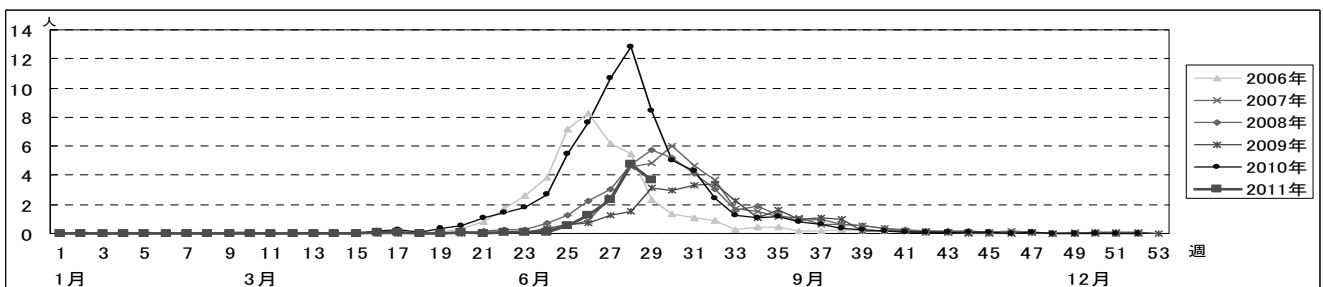
参考: 衛生研究所 H.P.手足口病について <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/handfoot2.html>

参考: 衛生研究所 H.P.手足口病 臨時情報 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/rinji/hfmd/hfmd201128w.pdf>

参考: 衛生研究所 H.P.手足口病 市民向けパンフレット <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punfi/pdf/hfmd201107.pdf>

3 **伝染性紅斑:** 第 29 週では、栄区 1.25 で、10 週警報レベルが持続していますが、横浜市全体は 0.30 で流行は終息に向かっています。

4 **ヘルパンギーナ:** 第 29 週では、港北区 5.38、緑区 6.20、青葉区 10.00、都筑区 7.33、瀬谷区 10.00 と 5 区で警報レベルとなっていますが、横浜市全体では、第 28 週 4.74→第 29 週 3.71 と、やや減少傾向を示しています。夏季に流行するため、引き続き注意が必要です。第 29 週では、県域(横浜、川崎、相模原市除く) 4.11、川崎市 5.84、東京都 6.85 となっています。



5 **流行性耳下腺炎:** 緑区 4.00、泉区 4.33 と注意報レベルになっています。横浜市全体でも第 28 週 0.52→第 29 週 1.16 とやや増加傾向にあり、今後の注意が必要です。

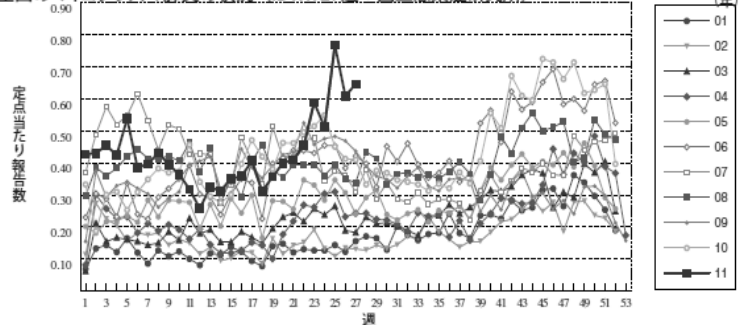
6 **急性出血性結膜炎:** 南区で 3.00 と警報レベルになっています。

7 **性感染症:** 6 月では、性器クラミジア感染症は男性が 35 件、女性が 17 件でした。性器ヘルペス感染症は男性が 8 件、女性が 13 件です。尖圭コンジローマは男性 11 件、女性が 7 件でした。淋菌感染症は男性が 15 件、女性が 2 件でした。

8 **基幹定点週報:** マイコプラズマ肺炎が全国的に第 24 週あたりから増加傾向にあり、注意が必要です。横浜市でも第 22 週から 28 週まで週 1~2 件ずつ報告されています。6 月は細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。

9 **基幹定点月報:** 6 月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症 11 件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

全国のマイコプラズマ肺炎の状況 (IDWR 27週: 国立感染症研究所)



この報告とデータの詳細については、下記に掲載されていますので、ご参照ください。
横浜市衛生研究所ホームページ URL: <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/>

《今月のトピックス》

- 手足口病は依然として流行していますが、ピークは越え、減少傾向となりました。
- ヘルパンギーナが 4 区で警報レベルですが、減少傾向が続いています。
- マイコプラズマ肺炎が全国的に流行しており、横浜市内でも注意が必要です。

全数把握の対象

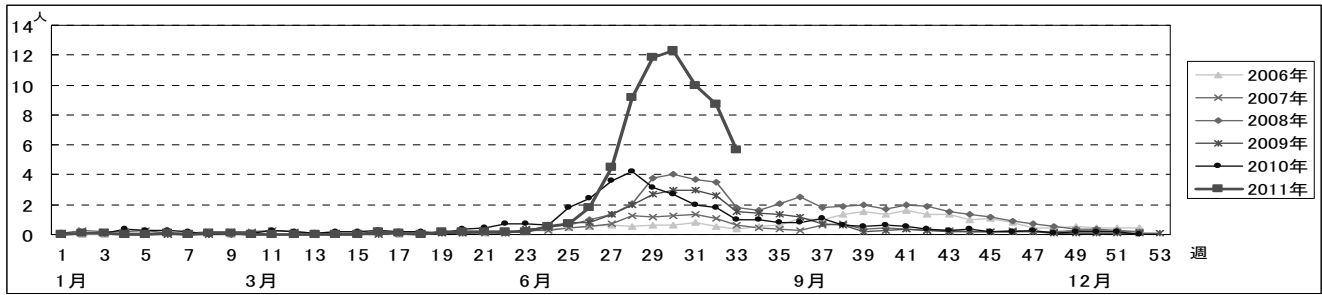
- 1 細菌性赤痢:2 件の報告がありました。どちらも菌種は *Shigella sonnei* です。渡航先(インド、中国(上海))での感染です。
- 2 腸管出血性大腸菌感染症:7 件(O157 VT1VT2 が 5 件、O157 VT2 が 1 件、O121 VT2 が 1 件)の報告がありました。また、同一家族内での発生が 2 件ありました。例年夏季に感染者数のピークを迎えるので 9 月も引き続き注意が必要です。
 啓発用チラシ「O157 に注意しましょう」<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>
- 3 デング熱:1 件の報告がありました。渡航先(タイ)での感染が推定されています。デング熱は、蚊が媒介する感染症で突然の発熱で始まり、激しい頭痛、眼球深部の痛み、関節や筋肉痛、発疹を特徴とします。近年、日本では年間発生数が増加傾向にありますが、すべて日本国外での感染で、タイ、インド、インドネシア、フィリピン、ミャンマー、ラオス、カンボジアなどでの感染が多く報告されています。デング熱が発生している国々では、虫よけスプレーの使用など、蚊に刺されない対策が必要です。最近の発生状況の動向については、国立感染症研究所ホームページ「デングウイルス感染症情報」をご覧ください。
- 4 マラリア:2 件の三日熱マラリアの報告がありました。2 件ともインド人で、1 件はインド(ムンバイ:旧ボンベイ)での感染が推定されています。もう 1 件では感染地域経路等不明でした。
- 5 レジオネラ症:肺炎型 1 件の報告がありました。感染経路は調査中です。
- 6 アメーバ赤痢:腸管アメーバ症 3 件の報告がありました。1 件は日本国内での同性間性的接触、もう 1 件はインドネシア(ジャカルタ)での経口感染が推定されています。残る 1 件は感染地域経路等不明でした。
- 7 後天性免疫不全症候群(HIV 感染症を含む):5 件の無症候期の報告がありました。4 件は国内での同性間接触、1 件は感染地域、経路とも不明でした。
- 8 梅毒:1 件の早期顕性梅毒(I 期)の報告がありました。国内での異性間接触によるものです。
- 9 バンコマイシン耐性腸球菌感染症:2 件の VanC 型の報告がありました。どちらも胆汁からの検出ですが、異なる医療機関からの報告です。
- 10 風しん:1 件の成人例の報告がありました。予防接種歴不明で、風しん IgM 上昇を認めています。
- 11 麻しん:10 代の臨床診断例、20 代の検査診断例(麻しん IgM 4.85)の 2 件の報告がありました。いずれもワクチン接種歴が 1 回ありました。感染経路感染地域等は不明です。麻しんは、重篤な症状を引き起こしたり、時には死にいたる疾患です。対象年齢児への確実な予防接種の実施が望まれます。

※各感染症については、衛生研究所 H.P.をご参照ください。 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/>

定点把握の対象

- 1 手足口病:6 月から西日本で流行が始まり、横浜市内でも 16 年ぶりとなる大流行となっています。第 33 週でも 15 区で警報レベルとなっていますが、横浜市全体ではピークの第 30 週 12.30 から第 33 週 5.69 と半分以下に減少しました。近隣の自治体でも第 33 週では、県域(横浜、川崎、相模原市除く)5.75、川崎市 6.54、東京都 4.17 と減少傾向です。なお、手足口病の原因ウイルスは、CA16 や EV71 が一般的ですが、今回の全国的な流行では CA6 が多く検出されており、横浜市でも、病原体定点から CA6 が検出されています。

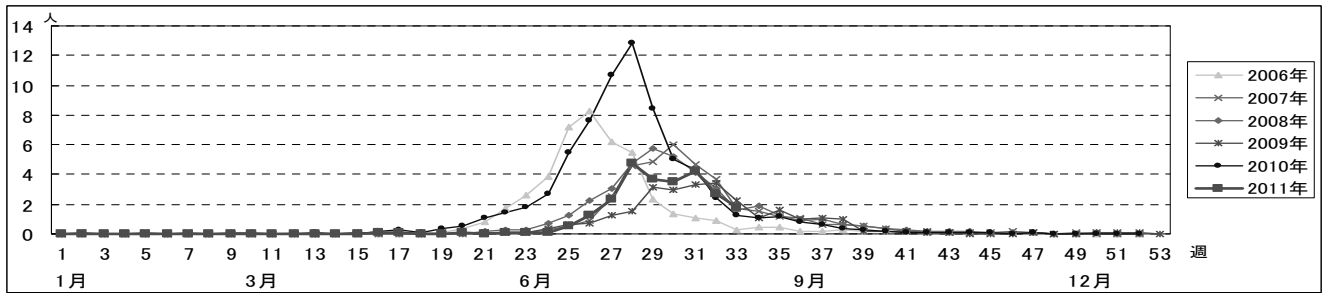
平成 23 年 週一月日対照表	
第 29 週	7 月 18~24 日
第 30 週	7 月 25~31 日
第 31 週	8 月 1~ 7 日
第 32 週	8 月 8~14 日
第 33 週	8 月 15~21 日



静岡県の報告¹⁾によると、今年CA6が検出された手足口病では、発熱率が高い、発疹が手掌や足底にはむしろ少なく、上腕・大腿部および臀部に高頻度に認め、口囲や頸部周辺にも認める等の特徴が指摘されています。CA6による手足口病では、罹患1~2か月後の爪甲脱落症も報告^{2),3)}されています。また、CA6感染による重症例も報告⁴⁾されているので、引き続き注意が必要です。(詳しくは下記ホームページをご参照ください。)感染経路は飛沫感染、接触感染、糞口感染であり、乳幼児への感染予防は手洗いの励行と排泄物の適正な処理が基本です。

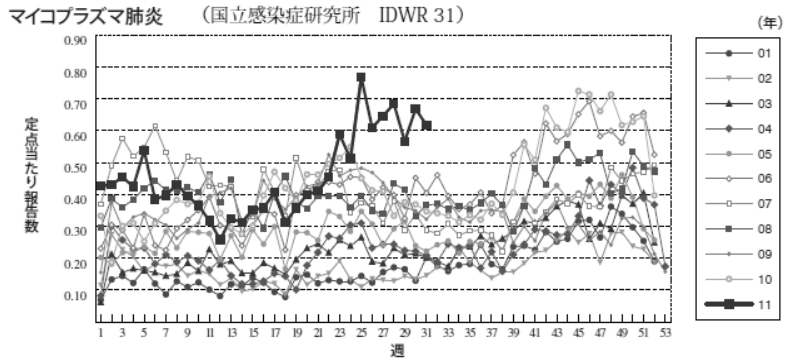
- 1) IASR<速報>2011年のコクサッキーウイルスA6型感染による手足口病の臨床的特徴—静岡県 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/pr3784.html>
 - 2) 浅井俊弥. 手足口病に続発した爪甲脱落症. 皮膚病診療 2011;33(3):237-240.
 - 3) IDWR 第28号<注目すべき感染症> <http://idsc.nih.go.jp/idwr/kanja/idwr/idwr2011/idwr2011-28.pdf>
 - 4) IDWR IASR<速報>心肺停止患者の咽頭ぬぐい液からのコクサッキーウイルスA6型(CA6)の検出と県内CA6の検出状況—鳥取県 <http://idsc.nih.go.jp:80/iasr/rapid/pr3793.html>
- 参考: 衛生研究所 H.P.手足口病について <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/handfoot2.html>
 参考: 衛生研究所 H.P.手足口病 臨時情報 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/rinji/hfmd/hfmd201131w.pdf>
 参考: 衛生研究所 H.P.手足口病 市民向けパンフレット <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/hfmd201107.pdf>

- 2 咽頭結膜熱: 第33週では、緑区2.25で警報レベルとなっています。横浜市全体では第31週0.43、第32週0.26、第33週0.26と落ち着いています。
- 3 ヘルパンギーナ: 第33週では、港北区2.57、緑区6.75、青葉区3.17、瀬谷区3.67と4区で警報レベルとなっていますが、横浜市全体では、下記のグラフのように減少傾向です。第33週では、県域(横浜、川崎、相模原市除く)2.89、川崎市2.57、東京都2.15となっています。



- 4 性感染症: 7月では、性器クラミジア感染症は男性が23件、女性が13件でした。性器ヘルペス感染症は男性が2件、女性が9件です。尖圭コンジローマは男性3件、女性が1件でした。淋菌感染症は男性が10件、女性が2件でした。

- 5 基幹定点週報: マイコプラズマ肺炎が全国的に第24週頃から増加傾向にあり、注意が必要です。横浜市でも第22週から33週までほぼ毎週数件ずつ報告されています。7月は無菌性髄膜炎が29週に5~9歳で1件、31週に10~14歳で1件ありました。細菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。



- 6 基幹定点月報: 7月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症7件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

この報告とデータの詳細については、下記に掲載されていますので、ご参照ください。
 横浜市衛生研究所ホームページ URL:<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/>

《今月のトピックス》

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加しています。
- レジオネラ肺炎の市内での報告が増加しています。
- 手足口病の流行は終息に向かっていますが、依然として 11 区で警報レベルです。
- RS ウイルス感染症が例年より多く、今後の注意が必要です。

全数把握の対象

- 1 コレラ: O1 稲葉型で、渡航歴等なく、感染原因・経路不明ですが、国内での感染が推定されています。
- 2 細菌性赤痢: 4 件の報告がありました。菌種は *Shigella sonnei* 3 件、*Shigella flexneri* 1 件です。*S. sonnei* 3 件のうち、1 件は県外での喫食による外食チェーン関連食中毒の事例で、もう 1 件はインドネシア(バリ島)での感染です。残る 1 件と *S. flexneri* の 1 件は、ともに国内での感染が推定されています。
- 3 腸管出血性大腸菌感染症: 16 件の報告がありました(O157 VT1VT2 が 7 件、O157 VT2 が 1 件、O26 VT1VT2 が 2 件、O26 VT1 が 1 件、O74VT2 が 4 件、O145VT2 が 1 件)。同一家族内での発生が 4 件ありました。家庭でできる一般的な食中毒の予防法の 6 つのポイント(①新鮮な食材の購入 ②冷蔵・冷凍での食材保存 ③手洗いの励行、清潔な調理 ④肉・魚の十分な加熱 ⑤食事前の手洗いと調理後はすぐに食べる ⑥清潔な容器で保存し温め直すときは十分に加熱、長時間過ぎたものは捨てる)を心がけましょう。
 ◆啓発用チラシ「O157 に注意しましょう」 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>
 なお、今月発生し、報道等で話題となった集団食中毒の起炎菌である O148 は、主に途上国への旅行者にみられる旅行者下痢症の主要な病原菌である毒素原性大腸菌の一つであり、感染症法の届出疾患には該当しません。腸管出血性大腸菌、毒素原性大腸菌などの下痢原性大腸菌感染症については下記をご参照ください。
 ◆下痢原性大腸菌感染症 http://idsc.nih.gov.jp/idwr/kansen/k00-g45/k00_50/k00_50.html
- 4 レジオネラ症: 肺炎型 9 件の報告がありました。5 件が同一の市内会員制スポーツクラブを利用しており、施設の浴槽水等からレジオネラ属菌が検出されたため、当該施設は 9 月 16 日から営業を停止しています(9 月 29 日現在)。現在、患者との菌の同一性について調査中です。他の事例については感染経路等調査中です。レジオネラ肺炎では、2~10 日程度の潜伏期間の後、全身倦怠感、筋肉痛、頭痛、高熱等の症状を呈します。 β -ラクタム系及びアミノ配糖体系抗生物質は無効で、マクロライド系、ニューキノロン系等が有効です。入浴施設の利用歴等の確認が重要です。
- 5 アメーバ赤痢: 腸管アメーバ症 4 件の報告がありました。2 件は日本国内での異性間性的接触、もう 2 件は国内での感染が推定されていますが、感染経路等不明でした。
- 6 急性脳炎: 成人の単純ヘルペスウイルスによる報告がありました。
- 7 後天性免疫不全症候群(HIV 感染症を含む): 3 件の無症候期、1 件の AIDS の報告がありました。2 件は国内での同性間性的接触、1 件は国内での異性間性的接触、1 件は感染地域、経路とも不明でした。
- 8 梅毒: 1 件の早期顕性梅毒の報告がありました。国内での同性間性的接触によるものです。
- 9 風しん: 成人例 1 件で、IgM 2.47 と上昇を認め、診断されました。予防接種歴不明です。

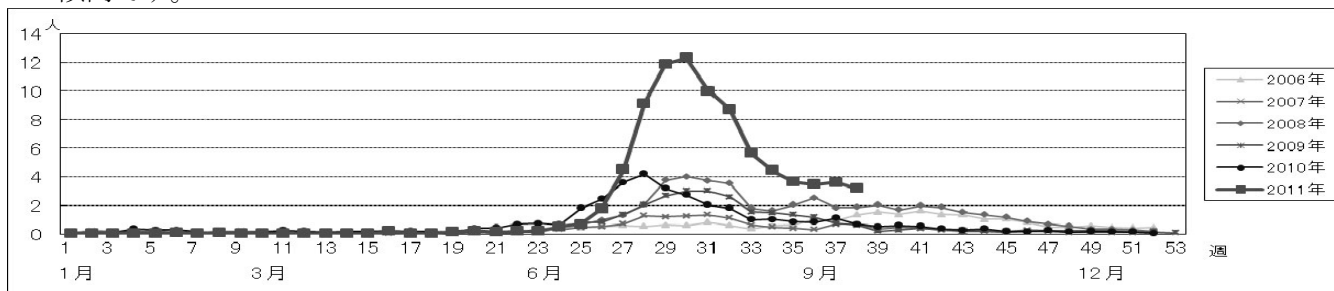
※各感染症については、衛生研究所 H.P.をご参照ください。 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/>

定点把握の対象

- 1 手足口病: 16 年ぶりとなる横浜市内の大流行も終息に向かいつつあります。しかし、第 38 週でも依然として 11 区で警報レベルとなっています。横浜市全体ではピークの第 30 週 12.30 から第 38 週 3.16 と 4 分の 1 程度に減少していますが、35 週以降やや横ばい状態となっているので、もう少し経過を注視していく必要があります。近隣の自治体でも第 38 週では、県域(横浜、川崎、相模原市除く)4.53、川崎市 2.82、東京都 3.39 と減少

平成 23 年 週一月日対照表	
第 34 週	8 月 22~28 日
第 35 週	8 月 29~9 月 4 日
第 36 週	9 月 5~11 日
第 37 週	9 月 12~18 日
第 38 週	9 月 19~25 日

傾向です。



静岡県の報告¹⁾によると、今年主流となっているCA6が検出された手足口病では、発熱率が高い、発疹が手掌や足底にはむしろ少なく、上腕・大腿部および臀部に高頻度に認め、口囲や頸部周辺にも認める等の特徴が指摘されています。CA6による手足口病では、罹患1~2か月後の爪甲脱落症も報告^{2),3)}されています。また、CA6感染による重症例も報告⁴⁾されているので、引き続き注意が必要です。(詳しくは下記ホームページをご参照ください。)感染経路は飛沫感染、接触感染、糞口感染であり、乳幼児への感染予防は手洗いの励行と排泄物の適正な処理が基本です。

1) IASR<速報>2011年のコクサッキーウイルスA6型感染による手足口病の臨床的特徴—静岡県 <http://idsc.nih.gov.jp/iasr/rapid/pr3784.html>

2) 浅井俊弥. 手足口病に続発した爪甲脱落症. 皮膚病診療 2011;33(3):237-240.

3) IDWR 第28号<注目すべき感染症> <http://idsc.nih.gov.jp/idwr/kanja/idwr/idwr2011/idwr2011-28.pdf>

4) IDWR IASR<速報>心肺停止患者の咽頭ぬぐい液からのコクサッキーウイルスA6型(CA6)の検出と県内CA6の検出状況—鳥取県 <http://idsc.nih.gov.jp:80/iasr/rapid/pr3793.html>

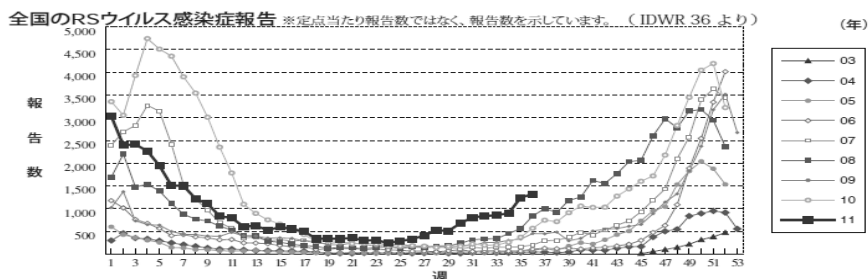
参考: 衛生研究所 H.P.手足口病について <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/handfoot2.html>

参考: 衛生研究所 H.P.手足口病 市民向けパンフレット <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/hfmd201107.pdf>

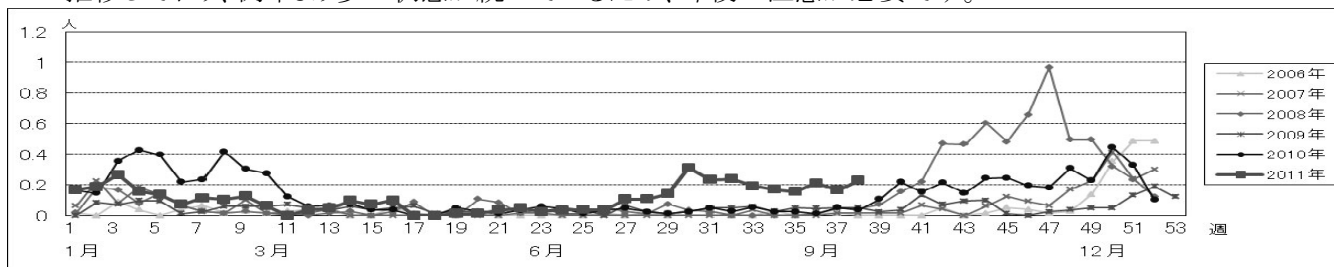
2 ヘルパンギーナ:38週では緑区3.25で警報レベルですが、市全体では、0.76と落ち着いています。

3 流行性角結膜炎:38週では瀬谷区8.00で警報レベルとなりましたが、市全体では1.29です。

4 RSウイルス感染症:RSウイルス感染症は、例年冬にかけて流行しますが、今年は右のグラフのように全国で例年より増加が早い状況が認められています。昨年2010年の38週では定点あたり0.24でしたが、2011年38週では0.43となっています。最も多い都道府県は宮崎県



2.64で、次に香川県2.47です。横浜市でも、下記のグラフのように、30週あたりから定点あたり0.20程度で推移しており、例年より多い状態が続いているため、今後の注意が必要です。



5 性感染症:8月では、性器クラミジア感染症は男性が22件、女性が7件でした。性器ヘルペス感染症は男性が7件、女性が4件です。尖圭コンジローマは男性10件、女性が2件でした。淋菌感染症は男性が18件、女性が1件でした。

6 基幹定点週報:マイコプラズマ肺炎が全国的に第24週頃から増加傾向にあり、注意が必要です。横浜市でも第22週から32週までほぼ毎週数件ずつ報告され、33週4件、34週6件、35週1件、36週5件、37週2件と報告されています。8月は無菌性髄膜炎が31週に10~14歳で1件ありました。細菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。

7 基幹定点月報:8月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症9件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

この報告とデータの詳細については、下記に掲載されていますので、ご参照ください。
横浜市衛生研究所ホームページ URL:<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/>

《今月のトピックス》

- マイコプラズマ肺炎の報告が増加しています。
- RS ウイルス感染症が例年より多く、今後の注意が必要です。
- インフルエンザが報告されはじめています。今後の動向に注意が必要です。
- 手足口病の流行は終息に向かっていますが、まだ 3 区で警報レベルです。

全数把握の対象

- 1 細菌性赤痢: *Shigella flexneri* 1 件の報告がありました。ネパールでの感染が推定されています。
- 2 腸管出血性大腸菌感染症: 2 件の報告がありました (O165 VT2、O157 VT1VT2)。腸管出血性大腸菌の食中毒を予防するためには、肉の中心部まで十分に加熱することが重要です。また、焼肉やバーベキュー等、自分で肉を焼きながら食べる場合も、十分に加熱し、生焼けのまま食べないようにしましょう。特に、若齢者、高齢者、抵抗力が弱い方は、重症化することがありますので、生肉や加熱不十分な肉料理を食べないことが重要です。
 - ◆啓発用チラシ「O157 に注意しましょう」 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>
 - ◆家庭でできる食中毒予防のポイント(動画) <http://www.youtube.com/watch?v=TI03jn2ElbU>
- 3 デング熱: 1 件の報告がありました。フィリピン(マニラ)での感染です。デングウイルスに感染した場合、かなりの確率で不顕性感染になると考えられていますが、実際、感染者がどの程度不顕性感染となるかはわかっていません。デング熱の症状は、感染 4~6 日後、突然の発熱で始まり、頭痛、特に眼窩痛、筋肉痛、関節痛を伴うことが多く、食欲不振、腹痛、便秘を伴うこともあります。発熱のパターンは二相性になることが多いようです。発症後、3~4 日後より胸部・体幹から始まる発疹が出現し、四肢・顔面へ広がります。これらの症状は 1 週間程度で消失し、通常、後遺症なく回復します。また、デングウイルス感染後、デング熱とはほぼ同様に発症し経過した患者の一部において突然、血漿漏出と出血傾向を主症状とするデング出血熱とすることがあります。重篤な症状は、発熱が終わり平熱に戻りかけたときに起こることが特徴的です。デング出血熱の致死率は国により数パーセントから 0.3%と異なります。2007~2010 年に国内でデング熱と診断された患者はすべて渡航先での感染であり、東南アジアを中心としたアジア諸国が 9 割を占め、特に 2010 年はインドネシア(79 例中 51 例はバリ島と記載有り)、インド、フィリピン、タイへ渡航して感染した例が多く報告されました。デングウイルスはネッタイシマカやヒトスジシマカの刺咬により人→蚊→人で感染環が成立します。前者は都市部に生息する蚊であり、後者は都市部と郊外の両方に生息します。ネッタイシマカは、日本では、南西諸島で昔生息していましたが、現在は生息が確認されていません。なお、日本でもヒトスジシマカは生息しており、今後、媒介する可能性も否定できません。実用化されたワクチンは無く、対症療法が中心です。患者の渡航歴等の問診が重要です。
 - ◆デング熱・デング出血熱について <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/dengue1.html>
 - ◆デング熱 http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k04/k04_50/k04_50.html
- 4 レジオネラ症: 肺炎型 1 件、ポンティアック型 1 件の報告がありました。どちらも感染経路等調査中です。
- 5 アメーバ赤痢: 腸管アメーバ症 2 件の報告がありました。1 件は日本国内での異性間性的接触、もう 1 件は感染経路、地域等不明でした。
- 6 後天性免疫不全症候群 (HIV 感染症を含む): 3 件の無症候期の報告がありました。すべて国内での同性間性的接触でした。
- 7 クロイツフェルト・ヤコブ病: 1 件の古典型クロイツフェルト・ヤコブ病の報告がありました。
- 8 バンコマイシン耐性腸球菌感染症: 1 件の報告がありました。VanC で、感染経路、地域等不明です。

※各感染症については、衛生研究所 H.P.をご参照ください。

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/>

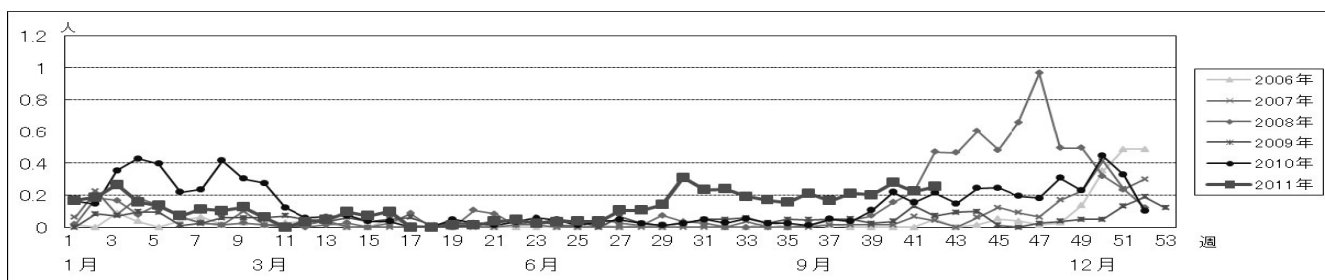
定点把握の対象

- 1 **インフルエンザ**:今シーズンに入り、市内では定点から第38週に1件、41週に2件、42週に3件報告されています。いずれも迅速キットでA型が陽性でした。第36週に市内の通所型障害者福祉施設でインフルエンザA型と診断された患者が複数保健所に報告されました。そのうち、5名の患者から検体を採取し、インフルエンザウイルスの検索を行ったところ、Real-time RT-PCR法による遺伝子検出では5名全員からAH3亜型ウイルスのHA遺伝子が検出され、分離培養検査では4名からAH3N2ウイルスが分離されました。ポストパンデミックに入った2010/11シーズンはAH1N1pdm09、AH3亜型、B型ウイルスの混合流行であり、この夏の南半球(夏季)でも3種類のウイルスが混在しています。南半球の流行状況はその後の北半球での流行状況の参考となることから、国内でも今シーズンも多様なウイルスの流行が予想されます。

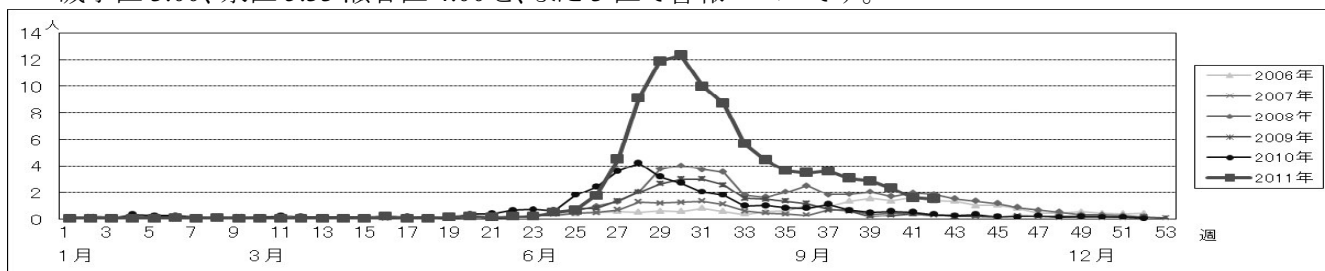
平成23年 週-月日対照表	
第38週	9月19～9月25日
第39週	9月26～10月2日
第40週	10月3～9日
第41週	10月10～16日
第42週	10月17～23日

◆横浜市内で発生したAH3亜型インフルエンザによる2011/12シーズンの集団かぜ初発事例 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/pr3812.html>

- 2 **RSウイルス感染症**:例年冬にかけて流行しますが、今年は全国的に例年より増加しています。横浜市でも、30週あたりから定点あたり0.20を超えており、例年より多い状態が続いているため、今後の注意が必要です。



- 3 **手足口病**:16年ぶりとなる横浜市内の大流行も、第42週では市全体で1.48とほぼ終息となりました。しかし、磯子区3.00、泉区5.33、瀬谷区4.00と、まだ3区で警報レベルです。



今年主流となったCA6による手足口病では、罹患1～2か月後の爪甲脱落症も報告^{1),2)}されているので、引き続き注意が必要です。

1) 浅井俊弥, 手足口病に続発した爪甲脱落症. 皮膚病診療 2011;33(3):237-240.

2) IDWR 第28号<注目すべき感染症> <http://idsc.nih.go.jp/idwr/kanja/idwr/idwr2011/idwr2011-28.pdf>

- 4 **伝染性紅斑**:42週では中区3.00で警報レベルですが、市全体では、0.14と落ち着いています。
- 5 **百日咳**:42週では中区1.50で警報レベルですが、市全体では、0.05と落ち着いています。
- 6 **性感染症**:9月では、性器クラミジア感染症は男性が29件、女性が18件でした。性器ヘルペス感染症は男性が5件、女性が6件です。尖圭コンジローマは男性9件、女性が3件でした。淋菌感染症は男性が19件、女性が1件でした。
- 7 **基幹定点週報**:マイコプラズマ肺炎が全国的に第24週頃から増加傾向にあり、注意が必要です。全国では、例年定点あたり0.2～0.6程度で推移していましたが、42週では1.13と増加しています。横浜市でも39週では定点あたり2.33、40週0.00、41週1.67、42週1.67と、昨年の39週0.33、40週0.67、41週0.00、42週0.00を上回っています。9月は無菌性髄膜炎、細菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。
- 8 **基幹定点月報**:9月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症9件で、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

この報告とデータの詳細については、下記に掲載されていますので、ご参照ください。
横浜市衛生研究所ホームページ URL:<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/>

《今月のトピックス》

- マイコプラズマ肺炎の報告が増加しています。
- インフルエンザが報告されはじめています。今後の動向に注意が必要です。
- 感染性胃腸炎が漸増しており、今後の注意が必要です。

全数把握の対象

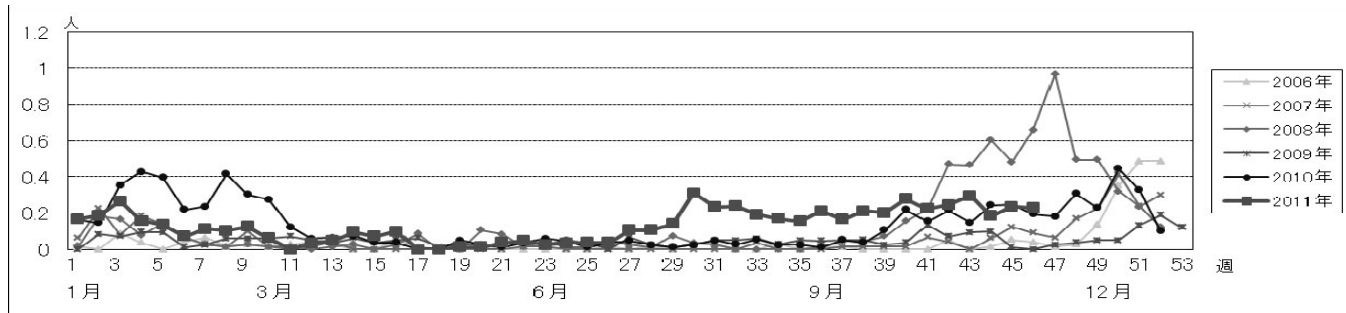
- 1 腸管出血性大腸菌感染症:1 件の報告がありました(O157 VT1VT2)。感染経路等不明です。
 ◆啓発用チラシ「O157 に注意しましょう」 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>
 ◆家庭でできる食中毒予防のポイント(動画) <http://www.youtube.com/watch?v=T103jn2ElbU>
- 2 レジオネラ症:3 件の肺炎型の報告がありました。感染経路等調査中です。
- 3 アメーバ赤痢:2 件の腸管アメーバ症の報告がありました。1 件は国内での経口感染が推定され、もう 1 件は感染経路感染地域等不明です。
- 4 劇症型溶血性レンサ球菌感染症:1 件の A 群溶連菌による報告がありました。50 代男性で、咳等の感冒様症状に引き続き、左胸背部痛、発熱で発症しました。本症は突然の発病と、発病から病状の進行が非常に急激なことが知られています。国立感染症研究所のホームページによると、最も一般的な初期症状は疼痛で、続いて圧痛あるいは全身症状が見られます。疼痛の開始前に、発熱、悪寒、筋肉痛、下痢のようなインフルエンザ様の症状が 20%の患者にみられ、全身症状としては、発熱が最も一般的ですが、患者の 10%はショックによる低体温を示します。抗菌薬としてはペニシリン系薬が第一選択薬です。また、組織内の菌密度が上昇すると菌の発育が抑制され、βラクタム系薬の効果が低下する現象が知られており、極端な敗血症病態では、細胞内移行性の高いクリンダマイシンを推奨する意見もあります。
 ◆国立感染症研究所:劇症型溶血性レンサ球菌感染症 http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g2/k02_46/k02_46.html
- 5 バンコマイシン耐性腸球菌感染症:1 件の報告がありました。遺伝子型は現在検査中です。感染経路感染地域等不明です。臨床上問題にされ、院内感染対策の対象となっているのは vanA または vanB 遺伝子を保有する腸球菌です。一方、vanC 型は今のところ、欧米でも重篤な感染症を引き起こしたとの報告は稀であり、また、健常者でも入念に検査した場合少なくとも数%から分離されると言われており、「常在菌」的性格も強く、院内感染対策の対象にはなっていません。しかし、感染症法では、vanC 型による重症感染症の発生状況を正確に把握するため、血液や髄液など通常無菌的であるべき臨床材料から vanC 型が分離された場合には報告対象に含めています。
 ◆国立感染症研究所:バンコマイシン耐性腸球菌感染症 http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g1/k02_16/k02_16.html
- 6 麻疹:ワクチン接種歴 2 回の児童で、修飾麻疹の報告が 1 件ありました。血清 IgM2.07 で、発疹を認めたため診断となりましたが、現在 PCR 検査で確認中です。
 ◆国立感染症研究所:麻疹の検査診断アルゴリズム <http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/pdf01/arugorizumu.pdf>
 ◆国立感染症研究所:麻疹届出ガイドライン http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/guideline/doctor_ver3.pdf

定点把握の対象

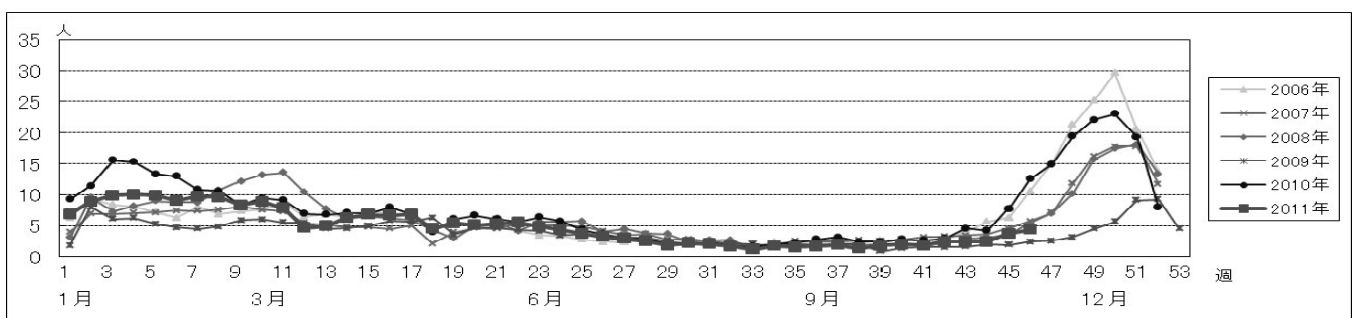
- 1 インフルエンザ:第 43 週に定点あたり 0.08、44 週 0.16、45 週 0.12、46 週 0.08 と、少しずつ報告がみられています。迅速キットの結果は 8 割ほどが A 型で、残りは B 型です。ポストパンデミックに入った 2010/11 シーズンは AH1N1pdm09、AH3 亜型、B 型ウイルスの混合流行であり、この夏の南半球(夏季)でも 3 種類のウイルスが混在しています。南半球の流行状況はその後の北半球での流行状況の参考となることから、国内でも今シーズンも多様なウイルスの流行が予想されています。

平成 23 年 週一月日対照表	
第 42 週	10 月 17～23 日
第 43 週	10 月 24～30 日
第 44 週	10 月 31～11 月 6 日
第 45 週	11 月 7～13 日
第 46 週	11 月 14～20 日

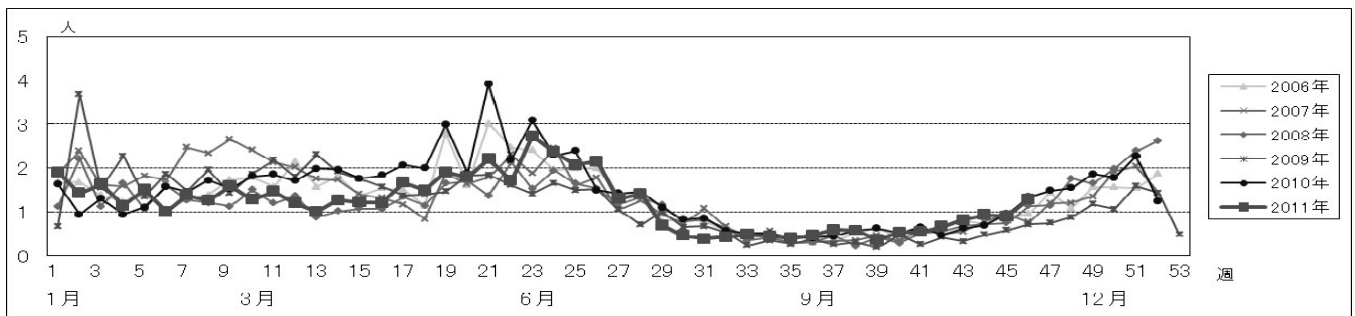
- 2 **RSウイルス感染症**:今年是全国的に流行の立ち上がりが見られました。横浜市でも、例年より早い30週あたりから定点あたり0.20を超えましたが、その後はほぼ横ばいが続いています。例年冬にかけて流行するため、今後の注意が必要です。



- 3 **感染性胃腸炎**:市内全体では現在のところ落ち着いていますが、44週2.38、45週3.71、46週4.32と漸増しています。区別では46週で泉区9.67、南区8.33、神奈川区7.17、鶴見区7.00と増加がみられており、今後の流行期に向けて注意が必要です。



- 4 **水痘**:市内全体では現在のところ落ち着いていますが、44週0.93、45週0.89、46週1.29と、少しずつ上昇しています。今後の注意が必要です。



- 5 **手足口病**:横浜市内の流行も落ち着き、第46週では警報レベルは瀬谷区2.00のみとなりました。
- 6 **性感染症**:10月では、性器クラミジア感染症は男性が19件、女性が16件でした。性器ヘルペス感染症は男性が2件、女性が8件です。尖圭コンジローマは男性8件、女性が1件でした。淋菌感染症は男性が8件、女性が0件でした。
- 7 **基幹定点週報**:マイコプラズマ肺炎が全国的に第24週頃から増加傾向にあり、注意が必要です。全国では、例年定点あたり0.2~0.6程度で推移していましたが、44週では1.15と増加しています。横浜市でも増加がみられ、第43週では定点あたり2.00、44週2.00、45週0.00、46週4.00と、昨年の43週0.67、44週0.33、45週0.00、46週0.00を上回っています。他の疾患では、44週に無菌性髄膜炎の報告が1件ありました。細菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。
- 8 **基幹定点月報**:10月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症5件で、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

この報告とデータの詳細については、下記に掲載されていますので、ご参照ください。
横浜市衛生研究所ホームページ URL:<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/>

《今月のトピックス》

- 感染性胃腸炎が流行しています。
- インフルエンザが報告されはじめています。今後の動向に注意が必要です。
- マイコプラズマ肺炎の報告が昨年と比べて増加が続いています。
- 水痘が瀬谷区で警報レベル、神奈川区で注意報レベルとなっています。

全数把握の対象

- 1 **デング熱**:1 件の 2 型の報告がありました。インドネシア(バリ島)での動物・蚊・昆虫からの感染が推定されています。デングウイルスは 4 つの型(1 型、2 型、3 型、4 型)に分類され、たとえば 2 型にかかった場合 2 型に対しては終生免疫ですが、6 ヶ月もすれば他の型に感染する可能性が出てきます。この場合、デング出血熱(致死率数%~0.3%)になる確率が高くなるといわれているので注意が必要です。
 ◆横浜市衛生研究所:デング熱・デング出血熱について <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/dengue1.html>
 ◆国立感染症研究所:デング熱 http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k04/k04_50/k04_50.html
- 2 **チクングニア熱**:1 件の報告がありました。インドでの動物・蚊・昆虫からの感染が推定されています。チクングニア熱、デング熱ともに発熱、発疹、疼痛(関節痛)を 3 主徴とし、両者の臨床鑑別は難しく、アジア・アフリカに多く、分布域もほぼ一致します。このため実験室診断が必須です。どちらも患者はすべて渡航先での感染であり、患者の渡航歴等の問診が重要です。また、媒介するヒトスジシマカは、日本でも東北地方に至るまで広くみられ、タイヤや空き缶に残っている非常に少量の水でも繁殖できるため、対策が困難な蚊であり、国内侵入に際して注意が必要です。
 ◆横浜市衛生研究所:チクングニア熱 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/chikunguniya1.html>
- 3 **レジオネラ症**:1 件の肺炎型の報告がありました。解体作業に伴う塵埃感染が推定されています。
- 4 **アメーバ赤痢**:2 件の腸管アメーバ症、1 件の腸管外アメーバ症の報告がありました。腸管アメーバ症の 1 件は海外での経口感染、もう 1 件は国内での異性間性的接触が推定されています。腸管外アメーバ症は国内の経口感染が推定されています。
- 5 **後天性免疫不全症候群(HIV 感染症を含む)**:1 件のニューモシスティス肺炎を発症した AIDS の報告がありました。国内での異性間性的接触です。
- 6 **バンコマイシン耐性腸球菌感染症**:1 件の vanC 型の報告がありました。感染経路感染地域等不明です。
 ◆国立感染症研究所:バンコマイシン耐性腸球菌感染症 http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g1/k02_16/k02_16.html
- 7 **風しん**:10 代の 1 件の報告がありました。発疹、微熱等を認め血清 IgM2.22 でした。予防接種歴は不明です。

定点把握の対象

- 1 **インフルエンザ**:徐々に増加傾向ですが、第 50 週では市全体で定点あたり 0.58 と、流行の目安である 1.00 を下回っており、例年より流行が遅い傾向です。ただ、西区 3.00、都筑区 2.25、南区、1.80、港南区 1.38、港北区 1.00 となっており、区によってはすでに流行期に入っています。迅速キットの結果は 8 割ほどが A 型で、残りは B 型です。全国のウイルス検出結果では、多くが AH3 で、残りが B 型であり、現在のところほとんど AH1N1pdm09 は検出されていません。横浜市衛生研究所では、まだ多くのウイルスの検出はされていませんが、今後流行期の検出状況について適宜報告していきます。

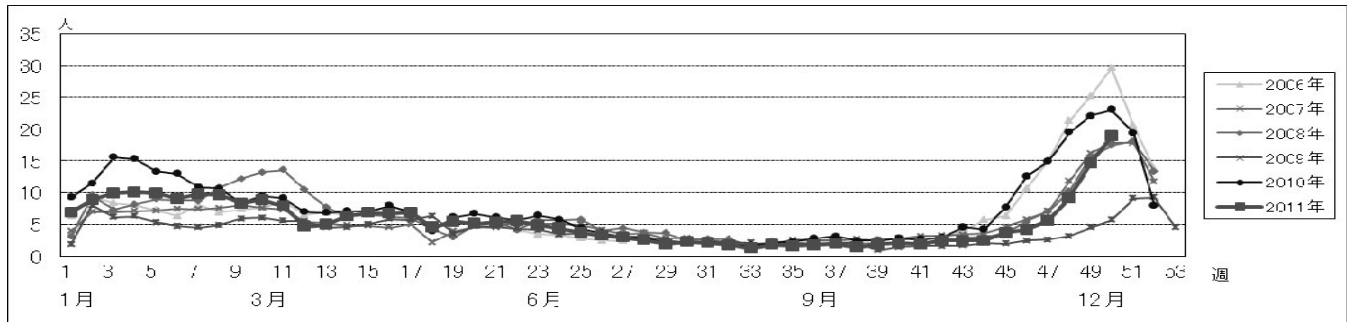
平成 23 年 週一月日対照表	
第 46 週	11 月 14~20 日
第 47 週	11 月 21~27 日
第 48 週	11 月 28~12 月 4 日
第 49 週	12 月 5~11 日
第 50 週	12 月 12~18 日

◆国立感染症研究所:インフルエンザウイルス分離・検出速報 2011/12 シーズン <http://idsc.nih.go.jp/iasr/influ.html>

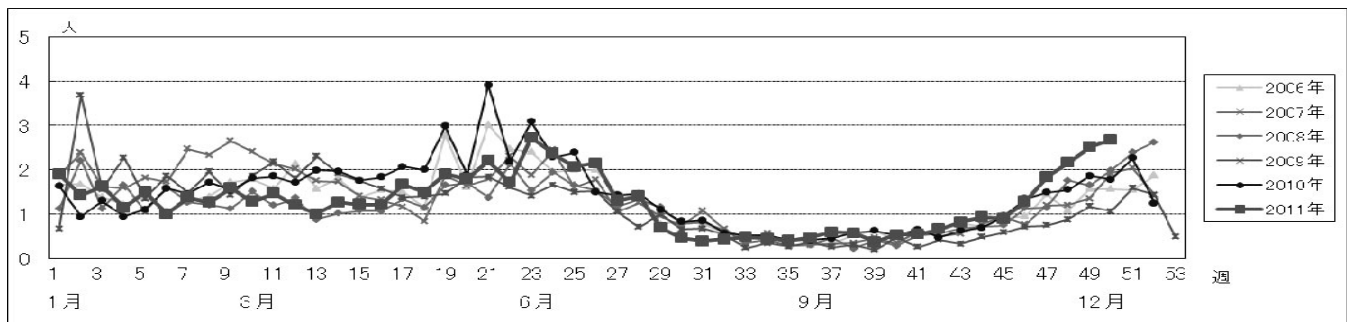
2 感染性胃腸炎:第50週では、市全体で18.86と警報レベルの20.00に僅かに届いていないものの、神奈川区38.83、磯子区26.50、緑区26.00、都筑区23.33、西区21.67と警報レベルを上回り、流行しています。予防には手洗い、便や吐物の適切な処理と消毒、食品の十分な加熱が重要です。ノロウイルスの消毒には次亜塩素酸による消毒が有効です。

◆横浜市衛生研究所:次亜塩素酸の詳しい使用方法 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/noro-yobou.pdf>

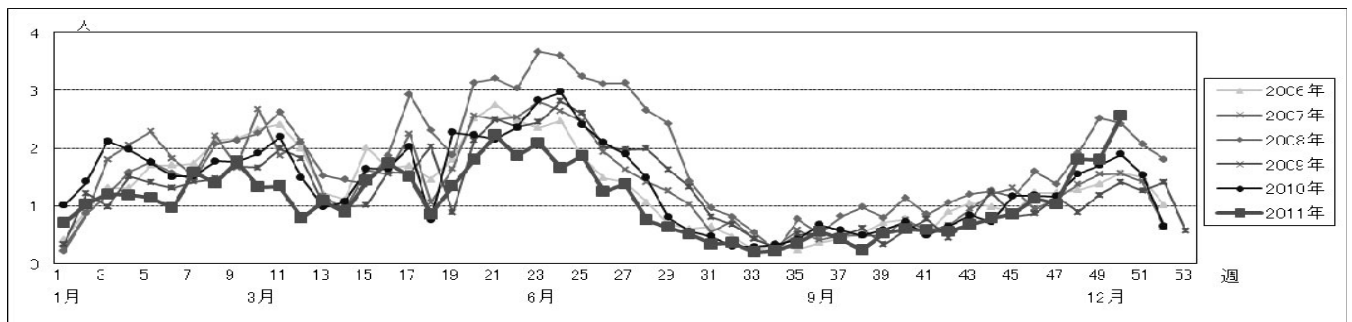
◆横浜市衛生研究所:感染性胃腸炎臨時情報 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/rinji/gas/gas201150.pdf>



3 水痘:市内全体では47週1.84、48週2.16、49週2.51、50週2.68と少しずつ上昇し、注意報レベルの4.00を下回っているものの、例年より多い報告が続いています。区別では瀬谷区10.25で警報レベル、神奈川区5.00で注意報レベルとなっており、今後の注意が必要です。



4 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎:市内全体では注意報レベルの8.00を大幅に下回っているものの、47週1.04、48週1.81、49週1.80、50週2.56と少しずつ上昇しています。区別では栄区10.75で警報レベルとなっており、今後の注意が必要です。



5 性感染症:11月では、性器クラミジア感染症は男性が21件、女性が13件でした。性器ヘルペス感染症は男性が7件、女性が12件です。尖圭コンジローマは男性2件、女性が3件でした。淋菌感染症は男性が9件、女性が2件でした。

6 基幹定点週報:マイコプラズマ肺炎が全国的に第24週頃から増加傾向にあり、注意が必要です。全国では、例年定点あたり0.2~0.6程度で推移していましたが、49週では1.51と増加しています。横浜市でも増加がみられ、第46週では定点あたり3.00、47週1.67、48週4.00、49週2.50、50週2.00と、昨年の46週0.00、47週4.00、48週0.50、49週0.00、50週0.50を概ね上回っています。無菌性髄膜炎、細菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。

7 基幹定点月報:11月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症3件、薬剤耐性緑膿菌感染症2件で、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

この報告とデータの詳細については、下記に掲載されていますので、ご参照ください。
横浜市衛生研究所ホームページ URL:<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/>



感染症に気をつけよう



1. 全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）

腸管出血性大腸菌感染症の報告が2例ありました。感染経路は不明です。

レジオネラ症の報告が2例ありました。感染経路は不明です。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は1例の報告がありました。創傷感染によるものでした。

HIV感染症は1例の報告で、男性の同性間性的接触によるものでした。

2. 定点報告感染症（感染症法における5類感染症）平成22年11月8日～12月12日

疾患名	市内流行状況	コメント
インフルエンザ	△ ↗	今月も市内で幼稚園・小学校等に集団発生が見られています。定点医療機関の迅速キットではA陽性が82件、B陽性が31件で、市内のインフルエンザはA型が多い状況です。
感染性胃腸炎	◎ ↗	警報レベルです。集団発生の報告もあり、広い範囲で流行が見られています。引き続き注意が必要です。
流行性耳下腺炎	△ →	過去5年間の中で報告が多く見られました。例年は秋には減少が見られていますが、この時期にしては多い報告です。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし

↗：増加傾向、→：横ばい、↘：減少傾向

3. いま気をつけたい感染症

- ・ インフルエンザに気をつけましょう。昨年は、新型インフルエンザが流行し、基礎疾患の無い健康な方にも、インフルエンザ脳症等重症の合併症が報告されています。新型・季節性に係らず、インフルエンザの殆どが一過性の感染に終わりますが、時には重症化し後遺症が残ることもあります。手洗い、マスクや咳エチケットによる一般的な感染予防を心がけましょう。また、予防接種は重症化防止に有効です。
- ・ 感染性胃腸炎に気をつけましょう。例年主に秋から冬にかけて流行します。市内の流行状況から、横浜市では12月16日に流行警報を出しました。集団感染事例からは、主にノロウイルスが検出されています。ノロウイルスは非常に感染性が強く、ウイルスに汚染された飲食物による食中毒としての感染以外に、便や吐物に含まれるウイルスによる感染症としての感染も起こします。調理や食事の前、トイレや汚物処理の後などの手洗いや、料理の十分な加熱、便、吐物の適切な処理と消毒を行い、感染予防をしましょう。消毒方法等の写真付きチラシなどを掲載している横浜市保健所のホームページもご覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/hokenjo/>

4. その他

「感染症に気をつけよう」は、12月16日の横浜市感染症発生動向調査委員会で検討された内容を市民向けに加工したものです。詳しくは、委員会報告書をご覧ください。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/infc_surv.html

「感染症Q&A」は、感染症以外のより広い保健衛生情報を扱うために、衛研Q&Aとして再出発します。引き続きご利用いただくと幸いです。

23年1月の衛研Q&Aもご利用ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/shimin/pdf/2011/eiken-q&a.pdf>

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html>

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/>



感染症に気をつけよう

1. 全数報告感染症(感染症法における1～5類感染症)1月報告

ツツガムシ病が1件報告されました。感染場所は不明ですが、ハイキング等野外でダニの一種(ツツガムシ)に刺されたことによる感染です。

マラリアが1件報告されました。エチオピアで蚊に刺されたことによる感染です。




急性脳炎が2件報告されました。インフルエンザA型によるものでした。

麻疹が3件報告されました。1件はフィリピンからの帰国者で、遺伝子検査で、麻疹ウイルスも確認されています。

2. 定点報告感染症(感染症法における5類感染症)

平成22年12月20日～平成23年1月23日

疾患名	市内流行状況	コメント
インフルエンザ	★	市内のインフルエンザは、警報レベルに近い注意報レベルで、この1週間で3倍の増加を見せているなど、強い勢いです。市内B型は約4%で、A型は新型と香港型が見られています。
感染性胃腸炎	●	12月中旬のピーク時に比べると、半減していますが、1月に入っても保育園等での集団発生も見られています。

★大流行 ◎流行 ●やや流行 ▲散発 ×市内発生なし
 増加傾向  横ばい  減少傾向

3. 今気をつけたい感染症

ツツガムシ病: ツツガムシは、一生に一度だけ人を刺します。その際、ツツガムシが、リケッチャ(菌の一種)に汚染されていると、刺された人がリケッチャに感染します。野外活動後、発疹、発熱に加え、身体のだこかに刺された跡があった場合にこの病気を疑います。「恙無く(つつがなく)お過ごしください。」と、昔からあいさつことばに使われていたくらい恐れられていた感染症ですが、関東から九州では卵が孵化する秋から初冬に見られ、東北・北陸地方では、越冬後の活動再開期の春から初夏に見られますので、発生時期には汚染地域に立ち入らないようにしましょう。また、立ち入る際は、ダニの吸着を防ぐ服装をすることや、作業後は入浴し、吸着したダニを洗い流すことが大切です。

インフルエンザ: B型は、12月までは市内の3割でしたが、1月に入っても、市内の4%程度とはいえ、広く市内で検出されています。また、幼稚園や小学校低学年の集団感染からは、A型の香港型がやや多く検出されています。市内の定点医療機関からは、A型の新型が多く検出されています。また、一つの集団から、二つのインフルエンザが検出されたりしています。A型が2種類(香港型、新型)、それにB型を加えた3つの型のインフルエンザが市内を流行しているため、一旦インフルエンザにかかっても、またすぐ別の型のインフルエンザにかかる可能性がありますので、マスク、手洗い等といった予防を継続しましょう。

4. その他

「感染症に気をつけよう」は、1月の横浜市感染症発生動向調査委員会で検討された内容を市民向けに加工したものです。詳しくは、委員会報告書をご覧ください。http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/infc_surv.html
 市民向け情報は、その他に衛生研究所の保健衛生情報を分かりやすく解説した「衛研Q&A」や、各種パンフレットも是非ご利用ください。<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/shimin/>

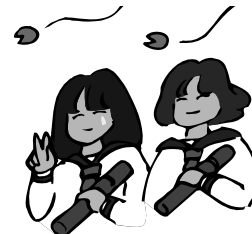
市内感染症に関する詳しい情報は、横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html>

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課 <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/mail.html>



感染症に気をつけよう



1. 全数報告感染症(感染症法1～5類感染症):2月の報告
細菌性赤痢が1件報告されました。インドでの感染と思われます

パラチフスが1件報告されました。ミャンマーでの感染と思われます。

マラリアが1件報告されました。ガーナでの感染と思われます。海外に行く際は、渡航先の流行状況に気をつけましょう。 外務省海外安全HP <http://www.anzen.mofa.go.jp/> をご参考ください。

A型肝炎が2件報告されました。1件は千葉県での感染によるものでした。

急性脳炎が2件報告されました。1件はインフルエンザB型、1件は原因不明です。

麻疹(はしか)が1件報告されました。先月報告された児からの感染でした。予防接種歴はありませんでした。その他への感染は確認されていません。

オウム病が1件報告されました。感染源は不明です。

2. 定点報告感染症(感染症法における5類感染症) 平成 23 年 1 月 24 日～平成 23 年 2 月 27 日

疾患名	市内流行状況		コメント
インフルエンザ	◎	↘	市内のインフルエンザは3週間続けて下降。ピークは過ぎたと思われませんが、A型とB型の内訳では、1月当初1割未満のB型が今や4割を越す勢いです。市内ではA型は新型と香港型、それにB型の3つのタイプのインフルエンザが見られています。
流行性耳下腺炎	●	→	昨年に引き続き、過去5年の中では最大級の報告数となっています。

★大流行 ◎流行 ●やや流行 ▲散発 ×市内発生なし

↗ 増加傾向 → 横ばい ↘ 減少傾向

3. 今気をつけたい感染症

麻疹(はしか):麻疹は、一旦発病すると非常に重症となり、時に死に至り、或いは治癒後も重たい後遺症が残る時もある重要な感染症ですが、予防接種の効果が非常に有効な感染症でもあります。

昨年市内で 32 人の患者の発生がありましたが、10 人は1歳以下でした。予防接種歴のあった方は 15 人のみでした。昨年の患者の2～3年前の首都圏での麻疹流行の後に、麻疹の予防接種は、1歳と就学1年前(年長さん相当)の2回接種となっていますが、経過措置として、2012 年までは、3期(中学1年相当)、4期(高校3年相当)の予防接種が行われています。現在中学1年生相当、高校3年生相当の方は、是非3月中までに3期4期の麻疹予防接種を受けましょう!。接種券を無くされた方は、再発行できますので、福祉保健センターにご相談ください。

A型肝炎:ウイルスが口に入る経口感染ですが、魚介類等の食材が汚染されている食中毒としての感染と、糞便を介した感染症としての感染と、性感染症としての感染が知られています。調理や食事の際の手洗いと、85°C1分以上といった十分な加熱が感染予防に有効です。

4. その他

「感染症に気をつけよう」は、2月24日の横浜市感染症発生動向調査委員会の内容を市民向けに加工したものです。

詳しくは、委員会報告書をご覧ください。http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/infc_surv.html

市民向け情報は、その他に衛生研究所の保健衛生情報を分かりやすく解説した「衛研Q&A」も是非ご利用ください。

市内感染症に関する詳しい情報は、横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html>

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課(感染症情報センター) <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/>



感染症に気をつけよう



1. 全数報告感染症(感染症法1～5類感染症):3月の報告
コレラが1件報告されました。フィリピンでの感染と思われま

す。細菌性赤痢が1件報告されました。タンザニアでの感染と思われま

す。海外の地域によって、感染の危険の高い感染症は異なります。海外に行く予定のある場合は、あらかじめ検疫所ホームページで、感染症流行状況を確認しましょう。

厚生労働省検疫所:海外で健康にお過ごしいただくための情報サイト <http://www.forth.go.jp/>

A型肝炎が1件報告されました。去年は全国的に報告が増えた年でした。

麻疹(はしか)が2件報告されました。臨床診断によるものです。去年は当初麻疹と診断されても、その後の検査結果や病気の経過から取り下げになることが多く見られました。伝染性紅斑(りんご病)と突発疹は、麻疹 IgM 抗体が交差反応で偽の陽性になることが知られています。一旦麻疹と診断されてからも、正しい対処のためには、主治医への相談を継続することが大切です。

定点報告感染症(感染症法における5類感染症)

平成 23 年 2 月 21 日～平成 23 年 3 月 20 日

疾患名	市内流行状況		コメント
インフルエンザ	◎	➡	市内のインフルエンザは、ピーク時から半減していますが、当初少なかった B 型が増えたこと影響もあり、減少は穏やかです。A型とB型の比は、B 型が8割を越えています。今年は彼岸過ぎても寒いので、まだまだ注意が必要な疾患です。
流行性耳下腺炎	●	↘	昨年引き続き、過去5年の中ではやや多めですが、落ち着いてきました。
感染性胃腸炎	▲	➡	流行は落ち着きましたが、まだまだ散発例が見られます。

★大流行 ◎流行 ●やや流行 ▲散発 ×市内発生なし

➡増加傾向 ➡横ばい ↘減少傾向

2. 今気をつけたい感染症

伝染性紅斑:バルボウイルス B19による感染症です。感染経路は飛沫感染ないし接触感染です。ごく稀に輸血による感染も見られます。両頬に境界鮮明な赤い発疹が現れ、手足や体幹にレース様の発疹が現れます。時に、風邪症状の前駆症状が見られます。成人では頭痛や関節痛を訴える場合があります。妊婦が感染すると、胎児の異常(胎児水腫)や流産を起こすことがあります。風疹とは異なり、先天性異常を起こすことはありません。通常春～夏にかけて流行する疾患です。横浜では、今の段階では流行は認められていませんが、今年は早くから患者の増加が報告されている自治体があります。

3. その他

「感染症に気をつけよう」は、2月24日の横浜市感染症発生動向調査委員会の内容を市民向けに加工したものです。

詳しくは、委員会報告書をご覧ください。 http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/infoc_surv.html

市民向け情報は、その他に衛生研究所の保健衛生情報を分かりやすく解説した「衛研Q&A」も是非ご利用ください。

市内感染症に関する詳しい情報は、横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html>

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課(感染症情報センター) <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/>



感染症に気をつけよう



1. 全数報告感染症(感染症法1～5類感染症):4月の報告

マラリアが1件報告されました。ギニア共和国での感染と思われ

れます。海外の地域によって、感染の危険の高い感染症は異なります。海外に行く予定のある場合は、あらかじめ検疫所ホームページで、感染症流行状況を確認しましょう。厚生労働省検疫所:海外で健康にお過ごしいただくための情報サイト <http://www.forth.go.jp/>

麻疹(はしか)が2件報告されました。臨床診断によるものです。近隣の自治体では、4月の第2週(11日～17日)に、東京都で14人の麻疹報告が見られています。一昨年も東京都の集団発生を発端として周囲の近県にまで流行が波及したことがあるので、今後の流行の状況に注意が必要です。

定点報告感染症(感染症法における5類感染症)

平成 23 年 3 月 21 日～平成 23 年 4 月 24 日

疾患名	市内流行状況		コメント
インフルエンザ	▲	→	市内のインフルエンザは、警報域を脱しました。現在市内で見られるインフルエンザは殆どが B 型です。4月に入り B 型による集団感染も報告されています。まだまだ注意が必要な疾患です。
流行性耳下腺炎	▲	→	昨年に引き続き、過去5年の中ではやや多めですが、落ち着いてきました。
伝染性紅斑	▲	→	流行は落ち着きましたが、まだまだ散発例が見られています。

★大流行 ◎流行 ●やや流行 ▲散発 ×市内発生なし

↗ 増加傾向 → 横ばい ↘ 減少傾向

2. 今気をつけたい感染症

麻疹(はしか):2008 年には全国で 11,015 人の患者が報告されていますが、2009 年には 739 人、2010 年には 457 人と激減しています。2011 年1月～4月に全国の衛生研究所で確認された麻疹ウイルスは 34 件あり、12 件は海外で感染したと推定され、更に7件が海外例からの感染拡大と思われる。ワクチンタイプも2件検出されています。

麻疹は感染力も非常に強く、罹患すると死亡や重大な後遺症もありえる重篤な疾患です。麻疹の予防には予防接種が非常に効果的です。麻疹の予防接種は、定期接種の第1期(1歳児)、第2期(小学校入学前年度の1年間)に加えて、2012 年度までは、第3期(中学1年相当年齢)、第4期(高校3年相当年齢)の接種も実施されています。接種該当年齢の方は、早めに予防接種を受けましょう。

3. その他

「感染症に気をつけよう」は、4 月 28 日の横浜市感染症発生動向調査委員会の内容を市民向けに加工したものです。

詳しくは、委員会報告書をご覧ください。http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/infc_surv.html

市民向け情報は、その他に衛生研究所の保健衛生情報を分かりやすく解説した「衛研Q&A」も是非ご利用ください。

市内感染症に関する詳しい情報は、横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html>

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課(感染症情報センター) <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/>



感染症に気をつけよう



1. 全数報告感染症(感染症法1～5類感染症):5月の報告

細菌性赤痢が1件報告されました。カンボジア王国での感染と思われます。海外の地域によって、感染の危険の高い感染症は異なります。詳しくは、厚生労働省検疫所ホームページをご覧ください。・海外で健康にお過ごしいただくための情報サイト <http://www.forth.go.jp/>

腸管出血性大腸菌感染症が7件報告されました。うち4件は、生肉を食べたことによる感染と推定されています。食肉には腸管出血性大腸菌やカンピロバクターなどの食中毒菌が付着している可能性があります。お肉を食べる際は、食中毒を引き起こさないためにも、必ず中心部まで十分に加熱してください。・横浜市啓発チラシ お肉は生で食べないで！

定点報告感染症(感染症法における5類感染症)

平成 23 年4月 25 日～平成 23 年5月 22 日

疾患名	市内流行状況		コメント
インフルエンザ	▲	↘	まだ市内で散発はしていますが、ほぼ収束したといえる状況です。
水痘	▲	→	一部地域で散発的に注意報レベルになりましたが、大きな流行はなく落ち着いています。
伝染性紅斑	▲	↗	5月に入り、一部地域で警報レベルになりました。市全体ではまだ落ち着いていますが、例年初夏から流行が見られる疾患ですので注意が必要です。

★大流行 ◎流行 ●やや流行 ▲散発 ×市内発生なし
 ↗ 増加傾向 → 横ばい ↘ 減少傾向

2. 今気をつけたい感染症

伝染性紅斑:パルボウイルスB19 の感染症で、頬に紅斑が見られることからリンゴ病とも呼ばれています。4～20 日程度の潜伏期間の後、発熱などの感冒症状に続いて、両頬、手足、体幹等に網目状の紅斑が見られますが、通常1週間程で消失します。主に5歳前後の小児に見られ、ほとんどは軽症ですが、成人が罹患した場合は頭痛や関節炎等を起こすことがあります。また、妊娠中の方が感染すると胎児に影響が出ることがあります。**4～6年の周期で流行を繰り返し、前回の全国的な流行が 2007 年であったため、今年は注意が必要です。**主な感染経路は飛沫か接触によるものですので、予防には手洗いが重要です。治療は、特異的なものはなく対症療法です。なお、発疹が出る前が感染性のある時期であり、発疹が出ている人を休ませても感染を防ぐことにはなりません。伝染性紅斑は学校での出席停止の対象にはなっていませんが、個々の症例について実際の判断は主治医が決めることになります。

「感染症に気をつけよう」は、5月 26 日の横浜市感染症発生動向調査委員会の内容を市民向けに加工したものです。詳しくは、委員会報告書をご覧ください。

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/surveillance/infc-surv.html>

市民向け情報は、その他に衛生研究所の保健衛生情報を分かりやすく解説した「衛研Q&A」も是非ご利用ください。また、市内感染症に関する詳しい情報は、横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/surveillance/report.html>

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課(感染症情報センター)

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/>





感染症に気をつけよう



1. 全数報告感染症(感染症法1～5類感染症):6月の報告

海外での感染が疑われる例として、パラチフス 1 件(インド)、A 型肝炎 1 件(ウズベキスタン)、マラリア 1 件(ザンビア共和国)の報告がありました。海外の地域によって、感染の危険の高い感染症は異なります。詳しくは、厚生労働省検疫所ホームページをご覧ください。

・海外で健康にお過ごしいただくための情報サイト <http://www.forth.go.jp/>

腸管出血性大腸菌感染症の報告が 12 件ありました。家族内感染と思われる例が 3 件あり、また生肉の喫食が原因と推定される事例も 1 件ありました。少ない菌量でも発症するため、手洗い(特に食品を扱うとき)を徹底するとともに、お肉を食べる際は必ず中心部まで十分に加熱してください。

・神奈川県内食品衛生協会連絡協議会作成パンフレット 腸管出血性大腸菌ってなあに？

定点報告感染症(感染症法における5類感染症)

平成 23 年 5 月 23 日～平成 23 年 6 月 26 日

疾患名	市内流行状況	コメント
咽頭結膜熱	● →	5 月下旬以降、一部地域で警報レベルに達しました。市内全域ではまだ落ち着いていますが、夏場に流行が見られる疾患ですので注意が必要です。
水痘	▲ →	一部地域で注意報レベルになるという状況が断続的に見られています。
手足口病	▲ →	これも夏場に流行する疾患です。市内では 6 月以降、定点あたりの患者数が着実に増えてきています。
伝染性紅斑	◎ →	6 月下旬になり、定点あたりの患者数が倍増しました。さらなる流行が予測されます。

★大流行 ◎流行 ●やや流行 ▲散発 ×市内発生なし
 ↗ 増加傾向 → 横ばい ↘ 減少傾向

2. 今気をつけたい感染症

咽頭結膜熱:アデノウイルスの感染症で、プール熱と呼ばれることもあります。4～5 日続く高熱、のどの痛み、結膜炎がこの疾患の三大徴候といわれています。アデノウイルスのワクチンは日本では認可されていないため、予防には手洗いが重要です。また、プールを介しての流行が知られているので、タオルの共用は避けましょう。咽頭結膜熱は学校での出席停止の対象疾患ですので、感染の診断を受けたときは、主治医の指示があるまで登校は控えてください。

「感染症に気をつけよう」は、6 月 30 日の横浜市感染症発生動向調査委員会の内容を市民向けに加工したものです。詳しくは、委員会報告書をご覧ください。

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/surveillance/infc-surv.html>

市民向け情報は、その他に衛生研究所の保健衛生情報を分かりやすく解説した「衛研Q&A」も是非ご利用ください。また、市内感染症に関する詳しい情報は、横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/surveillance/report.html>

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課(感染症情報センター)

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/>





感染症に気をつけよう



1. 全数報告感染症(感染症法1～5類感染症):7月の報告

腸管出血性大腸菌感染症の報告が6件ありました。うち3件は家族内感染と考えられています。食中毒に関連した報告はありませんでしたが、夏は特に食中毒のリスクが高まるため注意が必要です。

アメーバ赤痢の報告が7件ありました。このうち2件は性的接触が原因と考えられています。この他、性的接触が原因の感染症として、後天性免疫不全症候群(無症状のHIV感染症を含む)の報告が3件ありました。

定点報告感染症(感染症法における5類感染症)

平成 23 年 6 月 27 日～平成 23 年 7 月 24 日

疾患名	市内流行状況	コメント
咽頭結膜熱	◎ →	市内での定点あたり患者数は7月に入ってさらに増加しましたが、増加の勢いは鈍ってきています。
手足口病	★ ↗	今年は全国的に大流行しています。市内でも16年ぶりの大流行となっていて、今後さらに患者数が増える可能性があります。
伝染性紅斑	● ↘	7月の患者数はほぼ平年並みでした。流行のピークは過ぎたと思われます。
ヘルパンギーナ	● ↗	夏場に流行する感染症のひとつです。市内では6月下旬から定点あたり患者数が増え始めています。今後の動きに注意が必要です。

★大流行 ◎流行 ●やや流行 ▲散発 ×市内発生なし
 ↗ 増加傾向 → 横ばい ↘ 減少傾向

2. 今気をつけたい感染症

手足口病:夏場に多い、主に乳幼児の病気ですが、大人がかかることもあります。3～5日の潜伏期間の後、軽い発熱や、手のひら・足の裏・口の粘膜に発疹が出るのが特徴ですが、今年は、熱が高い・発疹の範囲が広いなど、通常と症状が異なるタイプが見られています。多くは1週間程度で治りますが、ごくまれに髄膜炎や脳炎になるケースもありますので、吐く、高熱が出る、または熱が続くときには早めに医療機関を受診してください。この病気を防ぐためには手洗いが重要です。特に小さいお子様がこの病気になったときは、おしめを交換した後の手洗いをしっかりすることが感染予防につながります。

・横浜市衛生研究所パンフレット 今年も手足口病が流行しています！

「感染症に気をつけよう8月号」は、7月28日の横浜市感染症発生動向調査委員会の内容を市民向けに加工したものです。詳しくは、委員会報告をご覧ください。

市内感染症に関する詳しい情報は、感染症発生状況をご参照ください。

また、衛生研究所では、一般の方用のパンフレットの作成もしていますので、併せてご利用ください。

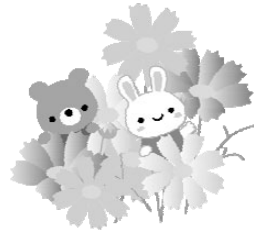
横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課(感染症情報センター)

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/>





感染症に気をつけよう



1. 全数報告感染症(感染症法1～5類感染症):8月の報告

海外での感染が疑われる例として、細菌性赤痢 2 件(インド及び中国)、 Dengue 熱 1 件(タイ)、マラリア 2 件(1 件はインド、もう 1 件は感染地域不明)、アメーバ赤痢(3 件中 1 件がインドネシア)の報告がありました。海外では様々な感染症にかかる可能性があるため、渡航前に下記のホームページをチェックするなどして備えましょう。また、予防接種の証明書が必要な国もあります。

- ・FORTH 海外で健康に過ごすために(厚生労働省検疫所ホームページ) <http://www.forth.go.jp/>
 - ・感染症 これだけ知っていれば怖くない!(日本旅行業協会ホームページ) <http://tabitokenko.visitors.jp/>
- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が 7 件ありました。うち 2 件は家族内感染と考えられています。

定点報告感染症(感染症法における5類感染症)

平成 23 年 7 月 25 日～平成 23 年 8 月 21 日

疾患名	市内流行状況		コメント
咽頭結膜熱	▲	➡	一部地域で警報レベルではありますが、市内ではほぼ終息したと思われるです。
手足口病	★	➡	7 月末をピークに市内の患者数は減少していますが、まだ例年以上に流行している状態です。
ヘルパンギーナ	◎	➡	7 月下旬から8月中旬に流行のピークを迎えました。患者数は平年並みです。

★大流行 ◎流行 ●やや流行 ▲散発 ×市内発生なし
 ➡ 増加傾向 ➡ 横ばい ➡ 減少傾向

2. 今気をつけたい感染症

ヘルパンギーナ: 夏場に流行する感染症のひとつです。主に乳幼児の病気ですが、大人が感染することもあります。ウイルスに感染してから 3～6 日程度の潜伏期を経て、発熱・喉の痛みで発症します。高熱が出ることも多いため、熱性けいれんを起こすことがあります。また、喉の奥に水疱ができて、やがて小さな潰瘍になります。重症になることは少なく、1 週間程度で治る病気ですが、ごくまれに髄膜炎を発症することがあるので注意が必要です。この病気に対するワクチンや特効薬はなく、対症療法が中心です。患者さんの鼻の分泌物や便にウイルスが多く含まれているので、感染予防には手洗いが重要になります。

「感染症に気をつけよう 9 月号」は、8 月 25 日の横浜市感染症発生動向調査委員会の内容を市民向けに加工したものです。詳しくは、委員会報告をご覧ください。

市内感染症に関する詳しい情報は、感染症発生状況をご参照ください。

また、衛生研究所では、一般の方用のパンフレットの作成もしていますので、併せてご利用ください。

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課(感染症情報センター)

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/>





感染症に気をつけよう



1. 全数報告感染症(感染症法1～5類感染症):9月の報告

腸管出血性大腸菌感染症の報告が 16 件ありました。うち 6 件は家族内感染と考えられています。家庭内での感染予防が重要です。なお、9 月中に報道等で話題になった毒素原性大腸菌(O148)は、全数報告対象疾患ではありませんので、今回の報告には含まれていません。

・啓発用チラシ 腸管出血性大腸菌感染症 O157 に注意しましょう!

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>

レジオネラ症の報告が 9 件ありました。うち 5 件は集団発生が疑われています。

その他、細菌性赤痢・アメーバ赤痢・後天性免疫不全症候群(HIV 感染症を含む)各 4 件、コレラ・急性脳炎・梅毒・風しん各 1 件の報告がありました。

定点報告感染症(感染症法における5類感染症)

平成 23 年 8 月 22 日～平成 23 年 9 月 25 日

疾患名	市内流行状況	コメント
手足口病	◎ →	今年は大流行の年となりました。流行のピークは過ぎましたが、現在もまだ警報レベルが続いています。
ヘルパンギーナ	▲ ↘	一部地域で警報レベルの流行が続いていますが、市内全体では落ち着いています。
RS ウイルス感染症	▲ ↗	例年秋から冬にかけて流行する疾患ですが、今年は立ち上がりが早めです。全国的にも患者数は増加傾向なので、例年以上に流行する可能性があります。

★大流行 ◎流行 ●やや流行 ▲散発 ×市内発生なし
 ↗ 増加傾向 → 横ばい ↘ 減少傾向

2. 今気をつけたい感染症

レジオネラ症: レジオネラという菌が原因の感染症です。20～45 度程度の温かい、停滞した水(お湯)で増殖しやすいという特徴があるので、管理不十分な公衆浴場、空調機の冷却塔、24 時間風呂や加湿器等が原因となり、集団感染を引き起こすことがあります。症状は、体のだるさ、発熱、頭痛、咳などです。乳幼児や高齢者など、抵抗力の弱い人が重症化しやすい傾向があり、注意が必要です。人から人へ感染することはありません。レジオネラは有効な抗生物質が限定されており、上記の様な症状で医療機関にかかる際には、お風呂等の利用状況も医師に伝えることが大切です。

「感染症に気をつけよう 10 月号」は、9 月 29 日の横浜市感染症発生動向調査委員会の内容を市民向けに加工したものです。詳しくは、委員会報告をご覧ください。

市内感染症に関する詳しい情報は、感染症発生状況をご参照ください。

また、衛生研究所では、一般の方用のパンフレットの作成もしていますので、併せてご利用ください。

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課(横浜市感染症情報センター)

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/>





感染症に気をつけよう



1. 全数報告感染症(感染症法1～5類感染症):10月の報告

海外での感染が疑われる例として、細菌性赤痢 1 件(ネパール)、デング熱 1 件(フィリピン)の報告がありました。海外では様々な感染症にかかる可能性があります。ワクチン等で予防できる感染症もありますので、渡航前に下記のホームページを確認するなど、情報収集を必ず行ってください。

- ・FORTH 海外で健康に過ごすために(厚生労働省検疫所ホームページ) <http://www.forth.go.jp/>
- ・感染症 これだけ知っていれば怖くない!(日本旅行業協会ホームページ) <http://tabitokenko.visitors.jp/>
- その他、腸管出血性大腸菌感染症・レジオネラ症およびアメーバ赤痢各 2 件、後天性免疫不全症候群(HIV 感染症を含む)3 件、クロイツフェルト・ヤコブ病およびバンコマイシン耐性腸球菌感染症各 1 件の報告がありました。

定点報告感染症(感染症法における5類感染症)

平成 23 年 9 月 26 日～平成 23 年 10 月 23 日

疾患名	市内流行状況		コメント
インフルエンザ	▲	→	実際の症例数としてはまだ少ないのですが、10 月以降、患者数増加の兆しが見られます。
RS ウイルス感染症	▲	→	今年は例年に比べて立ち上がりは早めのため、例年以上の流行が予想されていますが、10 月時点では、患者数の目立った増加は見られていません。
手足口病	●	↘	現在もまだ一部地域では警報レベルの流行が続いていますが、市内全体では 10 月下旬にようやく終息といえる状態になりました。

★大流行 ◎流行 ●やや流行 ▲散発 ×市内発生なし
 ↗増加傾向 →横ばい ↘減少傾向

2. 今気をつけたい感染症

RS ウイルス感染症：秋から冬にかけて流行する、主に乳児がかかる感染症です。まず鼻水から始まり、次いで 38～39 度の発熱、咳が出ます。通常は「普通あるいはひどい風邪」程度の症状で済みますが、高齢者や心臓・肺の持病がある人、免疫力が弱まっている人では重症化することがあります。予防には手洗いが重要です。また、タバコの煙が危険因子のひとつと考えられているため、感染症を防ぐために子供の受動喫煙を避けることも大切です。この感染症に対するワクチンはありませんが、早産児など、感染により重症化しやすいとされる子供には、感染予防としてパリビズマブ(シナジス®)という薬を使うことがあります。

「感染症に気をつけよう 11 月号」は、10 月 27 日の横浜市感染症発生動向調査委員会の内容を市民向けに加工したものです。詳しくは、委員会報告をご覧ください。

市内感染症に関する詳しい情報は、感染症発生状況をご参照ください。

また、衛生研究所では、一般の方用のパンフレットの作成もしていますので、併せてご利用ください。

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課(横浜市感染症情報センター)

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/>





感染症に気をつけよう



1. 全数報告感染症(感染症法1～5類感染症):11月の報告

レジオネラ症の報告が3件ありました。いずれも感染経路等不明

で、詳細は調査中です。

その他、アメーバ赤痢2件、腸管出血性大腸菌感染症・劇症型溶血性レンサ球菌感染症およびバンコマイシン耐性腸球菌感染症各1件の報告がありました。

定点報告感染症(感染症法における5類感染症)

平成 23 年 10 月 24 日～平成 23 年 11 月 20 日

疾患名	市内流行状況		コメント
インフルエンザ	▲	→	今のところ患者数は少ないですが、今後増加していくと予想されます。
RSウイルス感染症	▲	→	今年は例年に比べて立ち上がりが早めのため、例年以上の流行が懸念されていましたが、10月以降はほぼ平年並みの患者数となっています。
感染性胃腸炎	●	↗	11月に入ってから、徐々に患者数が増加しています。市内でも集団感染が疑われる事例が発生しており、今後の動向に注意が必要です。
水痘	●	↗	こちらも、秋口から患者数が増加傾向となっていますが、これまでのところは平年並みの報告数です。

★大流行 ◎流行 ●やや流行 ▲散発 ×市内発生なし
 ↗ 増加傾向 → 横ばい ↘ 減少傾向

2. 今気をつけたい感染症

感染性胃腸炎: 主に冬に流行する感染症で、原因としてはノロウイルスが有名です。ノロウイルスの場合は、ウイルスに汚染された水や食物を摂取してから 12～48 時間後に下痢や嘔吐、発熱といった症状が現れます。またノロウイルスには、①消毒用アルコールが効きにくい(→次亜塩素酸でないとなら効果がない)②熱に比較的弱い(消毒のためには85℃以上、1分以上の加熱が必要)、といった特徴があります。

・パンフレット ノロウイルスによる感染性胃腸炎にご注意ください！

小さいお子様ではロタウイルスによる胃腸炎にも注意が必要ですが、こちらは今年に入ってからワクチン(ロタリックス®)が日本で認可されました。このワクチンは生後6週に最初の接種を行いますので、接種を希望する場合は早めに主治医に相談しましょう。

「感染症に気をつけよう12月号」は、11月24日の横浜市感染症発生動向調査委員会の内容を市民向けに加工したものです。詳しくは、委員会報告をご覧ください。

市内感染症に関する詳しい情報は、感染症発生状況をご参照ください。

また、衛生研究所では、一般の方用のパンフレットの作成もしていますので、併せてご利用ください。

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課(横浜市感染症情報センター)

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/>



横浜市感染症発生動向調査事業概要
平成 23 年(2011 年)

横浜市健康福祉局 衛生研究所 感染症・疫学情報課
平成 24 年 11 月発行

〒235-0012 横浜市磯子区滝頭 1-2-17

Tel 045(754)9815

Fax 045(754)2210

紙へリサイクル可